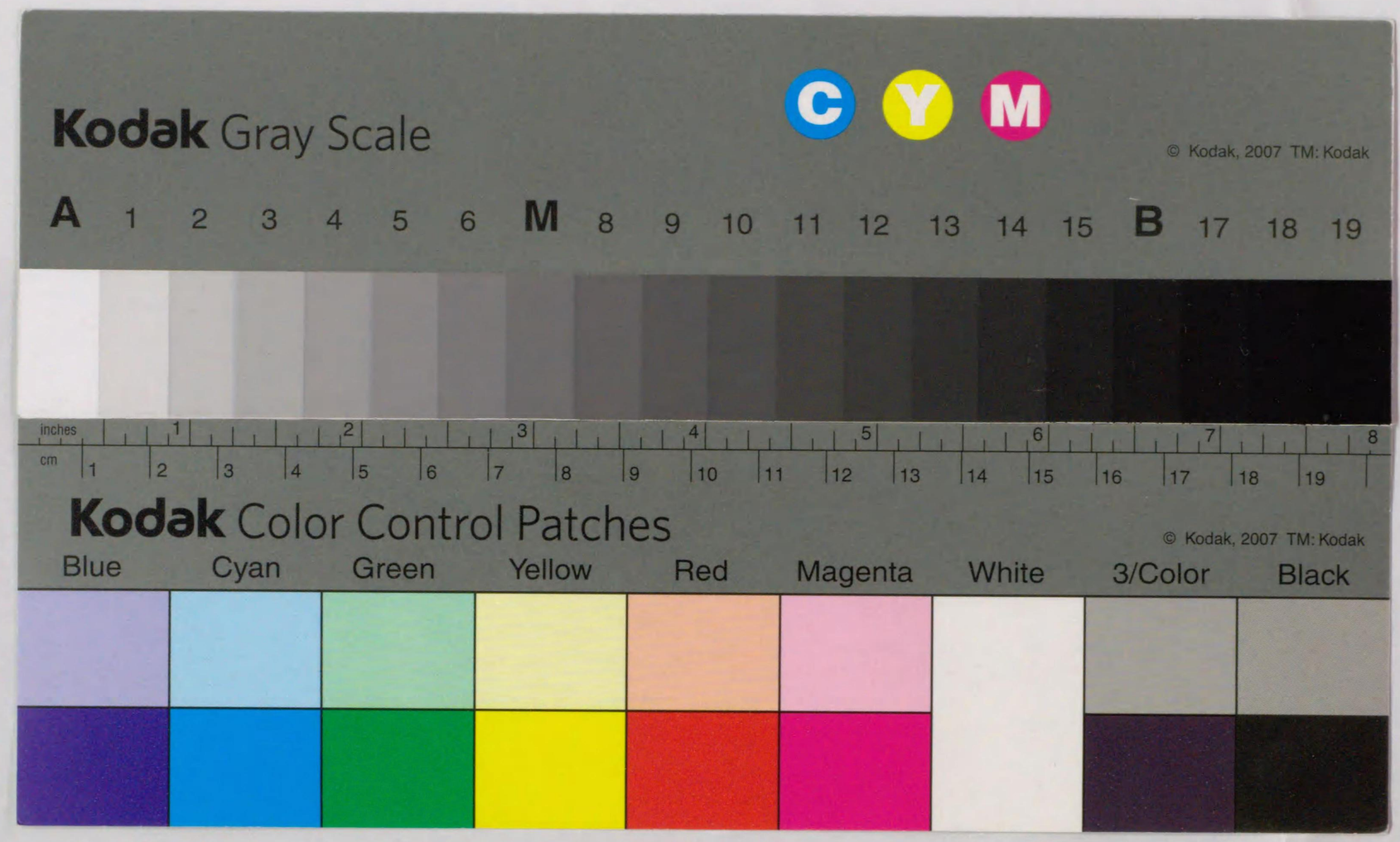

210
41

25

210-41
1200901410043

新刻後撰集新抄のはじめに

後撰集は、古今集ここもに、所謂延喜天暦のみさかりの世を代表する歌集なり。さゝをこの書は、古くより諸書にいへる如く、かの梨壺にて萬葉集を訓み解きし序でに撰ばしめられしにて、未定のまゝに傳へられしものこれぼしく、同歌の重出、作者の誤などをはじめ、こゝかしこにこゝろのはざるふし少なからず。されば、徳川時代の諸學者も、さる點に就きては、そを明らかにすることを忘れざりき。即ち、眞淵はうひまなびに之を論じ、宣長は言葉のつがね緒を著して、端作の語格にあはざるふしを改め正し、令世は歴代和歌勅撰考の中に、諸説を擧げて辨まへたり。又この集の歌の、古今集の撰ありて後ほどなく撰ばれしものこて、歌がらのよきあしきいりまじれるこゝは、已に

長明無名抄、爲家の抄、夜の鶴などにいへり。

後撰集が、體裁に、選歌に、こゝのはざるふし多きことは、古人の言のごとし。かつ撰者を見るに、その五人のうち、順の如きは、すぐれたる學者なりしかど、かの古今に於ける貫之の如き、中心たる地位に立てりともみえず。これはた、此集をして完璧ならざらしめし一つの原因と思はる。されど、また他方より考ふれば、本集の歌を一つ〳〵といづる時は、拙きも交れゝど、これを全體として見なば、必ずしも古今の歌風にさばかり劣れりとはしがたし。同じく延喜天暦の純雅の調を傳へて、中古歌風の一代表者となすべきものたり。次に、選出の體裁に於いても、その個々の缺點はさることながら、編制の大體より見むに、古今を襲へるものから、なほ多少の創意なきにあらず。卽ち、卷を二十にわかてるは、かの古今が萬葉によりて定めし例にならへるなるが、彼には離別羇旅を二卷にわかてるを、これには一卷とし、同むく賀哀傷とわかてるを、一卷にまとめたる、殊に、古今には、歌こそ新意の稱すべきものなしとせざるなり。

後撰集に就きては、古來より註釋少なからず。卽ち、古くは後撰集聞書註、後撰集正義、後撰秘說、近くは季吟の抄、後撰集標註、後撰集新抄等あり。その中に、註釋としてもすぐれたるは、本居大平の門人なる三河吉田の藩士中山美石が、文化九年に著しゝ後撰集新抄廿卷、別記一卷なり。には美石が、藩侯の命によりてものせしにて、廿卷のうち十四卷までと、別記と合せて十五卷は、すり卷に物して世に行はれたり。十五の卷より廿の卷にいたる六卷は、未だ刊行せられざりしを、我が父、明治十八年のころ、後撰集遠鏡を著しゝ折、中山家にこひ

て、その殘れる卷の稿本をかり得、そを書寫して家に藏したりき。

こたび、歌書刊行會に於いて、本書刊行の擧あるに際し、同會より中山家に問ひしに、かの稿本は、いかにかしけむ、今傳はらざるよしにて我が家の藏書を借らまほしここはれつ。もこより學問のため喜ぶべきここにしあれば、快く諾しつるに、序でに、後撰集竝びに本書に就きて、一言記してよと囑せられしまゝに、かくはいさゝか所感を述べつるなり。

なほ、この集に就きてのみいふべきにならざれど、古歌集の註釋は、大方は德川時代の學者の研究に盡きたり。後撰集また、本書にて足りぬべし。今より後、この集を讀まむ人は、本書の如きによりて一わたりその意を明らめ、更に進んで、古今と後撰との歌風の比較、その修辭、思想の特長などの問題の研究に入らざるべからず。

明治四十三年十月一日

佐佐木信綱識

後撰集新抄序

後撰集はいにしへのみさかりなりし代の歌ともにて歌まなひの道にこりてよく明らめすてはえあるまじき集になん有けるそは歌學ひの道には古の雅ひを心にならはしらてはえあらぬわさなれはなり古のみやひをしらてはそのよみいつる心も詞もたのつからいやしく淺はかに聞ゆめれは此道に入たゝむ人はまつよく思ふへきことにこそかくてこの集をあけつらふに古今集は大かた歌にくつましらすえりこゝのへられて萬たらひたるを此集はそれかうらうへにて四つの時戀雜なこわけたるにも思ひの外なるかたかひにいりみたれなこすへていこゝ大らかなるえらみにてそのかみ家々の集にまれ何にまれ見るにしたかひきくにしたかひこりあつめて

その歌のよきあしきをもいはすたゞあつめにあつめられたる物ゝ
見ゆるか物學ひのかたにこりてはこれもいこうれしきさいはひに
なむありけるそはかの万葉集の歌ゝもの古の眞心をしるたよりゝ
なれるこゝなし定めになんありける古今はたゝへは人の家居の南
表のかたにてよろつうるはしくみたりなるこゝましらぬかこゝく
此しふは北のかたのうちゝ〳〵のうちゝけ心安くいひかはす言の葉
の如くわかしきこゝもあはれなるこゝも思ふまゝにあらはにいへ
るさまにてその世のみやひ心をさたかにこゝろうへきは此集にな
ん有けるしかはあれゝも大かたそのをりふしの事にふれてよみい
てたる歌にて後の人のきゝわき思ひしるへからむためにゝは思は
ぬこもなれは今の世の人のよめるやうにひかこゝこそましらね本
末うちあはぬもあり又よみふくめたる下の心はへもよそへていへ

るたゝへの詞なゝもむけにわきまへかたき事のみ多かるにこれか
註釋ゝては爲家の大納言の抄ゝ季吟法印の八代集の抄ゝさては契
冲あさりのいさゝかつゝ書くはへたるこのみにていつれもねんこ
ろにゝきさゝしたる物にはあらすて一わたりの事のみこそあれい
さゝかも耳遠くめなれぬふしなこはかへりていかにこもいへるこ
こなくみなもらして此學ひにこゝろいれてさるふし〳〵あきらめ
たかむこゝゝろさす人々も木の葉かくれの谷の細道いこわけなや
みましてうひ學ひのほこはけはしき坂路の岩かこゝのほりわつら
ひこゝこほりかちにたのつから物うくして思ひなからうこきもの
に見すくすもあめりさるはあたらみやひこゝなる物をやこゝにた
のかをしへ子中山美石は三河の國吉田殿に仕へてよろつまめ人な
るかさいつこゝろその君よりかしこき仰ゝをうち〳〵なからうけ

給はりてこれか註釋をなん物するとて事しけき仕わさのいとまい
とまによみ考へたるもとよりなみ〳〵ならぬさえのほとしられて
たゝよはしくうきたることましらぬときこともにてけにかうも
思ひよるへかりけりとかひありてたほゆるもたほかるに猶これか
れしたしき友たちにもかたらひこゝろみてたのかもとへもすきす
きに見せてとかくあけつらひつゝ中にかのわきまへかたきふしふ
しは三度四度考へかへしなといみしう心をくたきて物せられける
はいとまめ〳〵しき心さしになんさるはかのむつかしきつたかへ
ての下道霧ふかき峯つたひのまとはしき所々もたふな〳〵ふみな
らしてみやま木のありともしらすゆきすくしたる歌もかくこそ花
も咲てはあれと心とまるはかりいとよくときをしへいとことさま
なるつゝけからのひかことかあやしとうちかたふかれしも今思へ

はかへりて枝さしたもしろき木たちのさまにてその世のしわさの
心にくゝたしはかられてたかしきもあり又こなたかなた道なき山
川のはるかなる岩岸なとに花か何そといふらむやうに手も足も及
ひかたき歌ともゝ猶すくなからねとしかあけつらひさためたるも
ひとつの功なれはかくまて物したるいさをのほとを思ふにこのま
まにてあらむはいとほいなきこゝちして世の歌人にとくしめさま
ほしく早く板にゑらせてしかなとそたもひよらるゝかし此所々に
も引いてたる詞のつかねをといふふみはわか鈴屋の翁この集の事
にこゝろかけてまつ詞書の本末むすほゝれたるふし〳〵をたにか
つかつときをしへはやとて物せられけるを今かくねむころなる註
釋のいてきたるを翁世にあらはうれしくかひありとこそめてられ
めかくてつひにすり卷になりていにしへ人のみやひ心も此ときさ

こしたるまめ心も世にひろくひろまりゆかは此事たもほしたこしての給ひつけゝる君のめくみもいかゝはかしこく世にたふこみ思はさるへき此こり〳〵なるめてたさを數ならぬ大平か心一つにたしこめかたくて思ひつらねたるこれやかて此ふみのはしかきこもならは又よろこはしからしやは

文化九年壬申春

本居大平

後撰和歌集新抄

總論

村上天皇の御時。梨壺の五人に詔して。万葉集をよみとかしめ給ふついでに。これをえらばしめ給ひ。一條攝政（謙徳公）其ころはいまだ藏人，少將にて。和歌所の別當をつとめ給ひ。古今の後にせんずこて。後撰集と名づけさせ給へるよし。されごもいかなるゆゑにか。正しくえらびあへずしてやめられたるによりて。しごけなきこごぐもゝまじれるよし。歌は古き姿にて。よき歌も多く。はたみだりがはしきもまじれるは。古今の撰より。（榮花物語には。廿餘年。古來風體抄には。四十餘年と見え。たり。天曆五年は。延喜五年より。四十五年にあたれり。）いくほごもなかりしかば。よき歌得がたくすがたをばえらばれずして。心をききこせられたればなりなごいふこご。榮花物語。袋草紙などをはじめ。かたが

たに見えたるをば。みな引出て下に記せり。正しくえらびあへられざりしものこ見えて。四季戀雜などわけられたるさまは。古今集こひこしけれご。戀雜などの歌こ見ゆるが。四季のうちに入たるなどもをりをりありて。歌の次序（ツイデ）もいこみだりがはしく。よみ人の名のしるしざまも。いかにぞや見ゆる所々もあり。或は。よみ人の名を誤たる所もありり。それにあはせて。詞書にもいこみだりがはしく。或は。いたくこことたらで。詞書を以て。歌の意をもこめむこするに。其こゝろ得がたく。又は。深きゆゑよしありてよみ出つらんこ見ゆるが。題しらずなど有て。さらにわきまふべきよしなきもあり。たふけなきいひごこながら。歌の意も。むげにをさなげに。つたなきさまなるなども。まれ〳〵にはまじれり。されご中には。後世にうつし誤たるここなどもあるべけれご。かにもかくにも。他の撰集にくらべては。いこ〳〵みだりがはしきこご多かる集になむありける。しかはあれご。すべてをいはゞ。みさかりなる世の風雅（ミヤビ）にて。くだりての世のわざなごの。かけても及ぶへきにはあらず。めでたしこもめでたく。いはんかたなく見ゆる事ごも〻いこ多かり。そはまづ。大かたは。其をりその事にふれて。たゞにはえあらぬあまりに。いにしへのさるみやび心より。いつはりかざりごこよげにいひなす事などはなく。心にたもへるすぢを。ありのまゝにいひ出られたる歌ごもにしあれば。今の世にては。人情（ヒトノコヽロ）の眞（マコト）を論ふべき法（ノリ）こすべきもいこ多く。（これらのことは。其歌の所々に。委くいへり。）詞がらなごの。をさ〳〵耳なれぬさまなるなごもまじれゝご。それはたゞこのみてしかよまれたるにはあらず。えんにもをゝしくも。たゞ意詞のよりくるまゝにものせられたるにしあれば。こあるもかゝるもいこめでたくなんありける。さるゆゑに。今及ばぬ心にも。こゝろをかたぶけて。つら〳〵あぢはひ見れば。

そのよみ出られたらんをりのこゝちたしはかられて。ひごりゐみもせられ。涙もさしぐまるゝぞかし。これ此集のえらびのいご〳〵大らかにて。貝や玉やごまじらへるさまなるがゆゐに。をかしき事も。あはれなるふしも。思ふまゝにあらはにいへる歌多かればなり。これぞ師の序にもいはれたる。其世のみやびをさだかに心得べきたねにて。今ごなりては。かへりていごうれしきさいはひなりける。ここに此集は。あだし集ごもよりは。詞書ある歌いご多きを。さはいへご。さるみさかりなる世の手ぶりにしあれば。いごこまやかなるうちごけ言をも。大らかにうるはしくかきごりて。さて深き心ばへをふくみたるなごは。中々古今集よりも數多くなん見ゆめる。それにあはせて。歌も。うち聞たる所は。たゞいご大らかに。或は本するゐうちあはぬさまに聞ゆるなごにも。よみふくめられたる下の意は。いごも〳〵ふかきたくみあり

て。よく心をいれてあぢはひ見ば。いよ〳〵こまやかなる意も。うかゞひしらるべく見ゆるもあり。すべて此集の風雅は。かの源氏物語の文章の。深き心用ひごもはら同じさまなりご。師翁もいはれたり。さていにしへ人の風雅のたもふきをしるは。歌まなびのためはいふに及ばず。古の道を明らめしる學問にも。いみじくたすけごなるわざなりかし。すべて人は。雅のたもふきをしらでは有べからず。これをしらざるは。物のあはれを知らず。心なき人なり。かくて。其みやびの趣をしるごは。歌をよみ。物語書なごをよく見るにあり。然して古人のみやびたる情をしり。すべていにしへの雅たる世のありさまをしるは。これ古の道をしるべき階梯なりなご。鈴屋翁もいはれたり。かゝればかくめでたきふみの今の世に傳はれるは。かへすゞ〳〵もいごうれしきさいはひならずや。されば古のみやびに心ざしあらん人は。なほざりに見

過すべきにはあらずなん。かくて此集のことの。古き書に見えたるは
○榮花物語。月宴巻云。むかし高野の女帝の御代。天平勝寶五年には。左
大臣橘。諸兄。諸卿大夫等あつまりて。万葉集をえらばせ給ひ。醍醐の先
帝の御時は。古今集二十巻えりとゝのへさせ給ひ。よにめでたくせさ
せ給ふ。たゞ今まで。二十餘年なり。いにしへの今の。ふるきあたらしき
歌えりとゝのへさせ給ひて。世にめでたうせさせ給ふ。此御時には。其
古今にいらぬ歌を。昔のも今のもせんぜさせ給ひ。のちにせんずとて。
後撰集といふ名をつけさせ給ひて。又二十巻せんぜさせ給へるぞか
し。それにも。此小野。宮のたゞの御歌。多くいりためれ。たゞし古今に
は。貫之序いとたかしうつくりてつかうまつれり。ごせんしふにも。さ
やうにやとたぼしめしけれご。かれは。其時の貫之。このかたのじやう
ずにて。いにしへをひき今を思ひ。ゆくすゑをかねて。たもしろくつく
りたるに。いまはさやうの事にたへたる人なくて。くちをしくたぼし
めしけり云々。
○袋草紙云。天暦五年。十月日。詔二坂上。望城。源。順。紀。時文。大中臣。能宣。清原。
元輔等一。於二昭陽舎一。令レ讀二解万葉集之次一。令レ撰レ之。號二梨壺五人一也。一條。攝政爲二藏人一。少
將之時。力此所。之別當。有二奉行文一。于レ時有二平。兼盛一而不レ入二此中一。不審云々。此。集未
定止之云々。仍本無二四度計一。但證本ハ。朱雀院塗籠本。又青表紙云々。是ハ範永本也
云々とて。作者の誤れる論なご。これかれ見えたり。
○後拾遺集。序云。村上のかしこき御代には。又古今和歌集に入らざる
歌。はた巻を撰出て。後撰集と名づく。又花山の法皇は。さきの二の集に
いらざる歌をこりひろひて。拾遺集と名づけ給へり。かの四の集萬葉より。拾遺
までをいふなり。は。ことのはゝぬひものゝごとく。心は海よりもふかし云々。
○爲家卿。抄云。凡古今拾遺は。歌ごもかいそろひたる集。後撰集は。よき

歌のよさ。わろき歌のわろさ。たのみがたき集なりと。先人は申されし云々。

○此集の證本といふもの。袋草紙に見えたるは。後世には傳はらぬなるべし。定家卿の奥書に。天暦五年。十月晦日。於昭陽舎撰之。爲藏人左近少將藤原伊尹別當寄人。讃岐大掾大中臣能宣。河内掾清原元輔。學生源順。近江少掾紀時文。御書所預坂上望城等也。謂之梨壺五人云々。貞應二年。九月二日辛巳。爲後代之證本。重書寫所傳之家本。悉用所父庭訓。爲傳嫡孫也。同三日。令讀合候畢。書入落字畢。戸部尚書藤判。又。此集。故者公卿皆書朝臣字。古今此體也。枇杷左大臣歌。戀部與伊勢贈答。書業平名。如此事。後代人。或推而直之。是非書寫誤。此集本説也。不可直改。作者名字等。家々之本。多相替。皆隨所受之説書之。同歌入兩部。古今歌加入。如此事只隨本云々。又。天福二年。三月二日。重以家本終書功畢。桑門明靜と書給へる本。又。行成大納言自筆の本にて校合して。天福二年。四月六日校也と。かきそへ給へる本もあるよしなれども。いづれも寫本にて。たやすく得がたく。今見及ばざるは。季吟法印の。八代集抄に引かれたるなどによりてしるせり。さて。此奥書にも見えたるもぶきにては。よみ人の名のたがへる。同じ歌の二所に出たるなどやうの。いさゝかの誤は。古き事と見ゆれば。今改むべきにはあらず。さりとてなほあるべきにもあらねば。其所々に委く論へり。猶此集の事。八雲御抄。古來風體抄。長明法師の無名抄なご。其他これかれの書に見えたるもここなるここなきは。今はしるさず。さて榮花物語に。此集の序なきゆゑをいへるを。季吟法印のいぶかりて。此御時にも。源順なご有て。野宮の歌合の判詞。當座にいみじくかきたりし事なごあれご。なほ貫之には及ぶまじくたぼしめしたるにや。又。此集未定にてこれを止と。袋草紙にも侍

れば。序をかゝしめ給ふまでにも及ばざるにや。はかりがたき事なるべしこいはれたるは。さることなりげに順朝臣は名高き人にて。八雲にも。順又稽古のものなりこのたまはせしばかりなれは。此序かゝしめ給はんに。あかぬことはあるまじく思はるれば。序かゝしめ給ふまでには及ばざりしなるべし。

○歌の數は。八雲御抄には。千四百二十首と見え。袋草紙には。千三百九十六首と見えたり。今ある本は。千四百二十六首ありて。其中に。古今集の歌八首。こゝかしこ二所に出たる歌六首見えたり。かくて。此千四百二十六首にいでたる六首を除けば。八雲に千四百二十首とあるにはかなへごとも。なほ御抄のころの本に。同じきやあらずやは知がたし。又拾芥抄には。千四百二十首。或千三百五十六首とあり。千四百二十首は御抄と合ひ。或の方は何れこもかなはず。

凡例

○歌の解(トキ)ざまは。鈴屋大人の。古今集遠鏡に過たるはなし。古(ヘ)の雅言(ミヤビゴト)を正しく今世(イマノヨ)の詞(コトバ)に譯(ウツ)されたれば。其歌よみ出たるをり。其人の心に思へりしくまゝ〳〵まで。殘(リ)なく我心の底(ソコ)に得(エ)らるゝ物は。遠鏡なり。故(カレ)今も遠鏡の如くこかまほしけれご。そはいこ〳〵大事なるわざにて。いさゝかの譯(ウツ)しざまにて。いたく物ぞこなひこなる事も。又かの譯しざまに過たるはなく。たゞぼろけのものゝ。かけても及ぶべきならねば。今は。縣居大人の。百人一首うひまなびなごのさまにものしつ。されご。遠鏡の解(トキ)ざまのげにこ心に入て。心得やすく。つねにしかたもふより。又人々にもしかこきさこしなれたる心は。たのづから。遠鏡ざまのこもすればうちまじりて。そこかしこと打こけたる俗言(サトビゴト)をまじへたるも多く。又詞の勢(イキホ)ひなご。委くいはまほしき所々は。いよ〳〵かの譯言(ウツシゴト)の

ふりに物したり。そは上に細書とせり。

○六帖。家集などに見えたる歌。又異本。一本などの異同を。悉く記さむは。かへりてわづらはしければ。今は正しかるべく見ゆる方と。論ふべきふしあるとをのみ。かたはらにしるして。其他ははぶけり。

○古今集などに見えたる詞にても。又此集に初て見えたる詞などにても。少し耳遠きこゝちし。或はもとの意わきまへがたきやうなるなどは。ことに例など引出て。委くものしつ。こは。うたてあまりなりと見ゆるふしもあるべけれど。たのがいまだしくたど〳〵しきにくらべて。初學の人は。誰もかくやと思はるゝによりてなり。

○枕言の意を。委くいはんとすれば。中々一首の意まぎらはしくなるすぢもあるものなれば。大かたはもらしつ。されど。中には。其よみいれたるさまによりて。もとのこゝろをもいはでは。事たらぬこゝちする所々もあり。さるをりには。縣居，大人の冠辭考をもとにて。これかれの隨筆などに見えたる說をも引出てとけり。

○てにをはの事は。鈴屋，大人の。詞の玉の緒。世にひろまりてより。歌よむといふ人は。みなよく心得て。たれも明らめたるやうなれど。猶よく考へ合すべきは。此集のころの歌を以て。證（アカシ）ともすべければ。その歌につきて。ことにたどろかしししらせたる事多し。そのてにをはのさまをよくものせざれば。歌の意たしかに心得がたき所々には。此玉の緒を引いでゝ。うるさきまでさとしたけり。これ。歌をとくには。肝要の事なればなり。師翁又さらぬ人々。たのれが考などをもあげていへり。

○詞書のみだりがはしくふとわきまへがたきなどをば。詞のつかね緒をよりて。鈴屋，大人のわきまへ正したかれたれば。其所々に。つかね緒云と記て。其說を殘なく頭書とす。こは本集の詞書とならべなどし

て記さまほしけれご。さては。本集の詞書と見合さんに。たよりあしきふしもあればなり。さていふべきふしある所は。本集の詞書のつぎにしるしつ。

○作者の世系。官位の次第なごは。要をつまみて記さんこすれば。作者部類を殘なく記し。公卿補任。大系圖。扶桑略記なご。其ほかの書ごもに見えたる事をも。用あるかぎりはつみ出たり。さて次序は。まづ此集の撰者たちをさきこし。次々は。歌のついでにしたがひて。春。上巻より次(ツイ)第(デ)て。巻の末に附たり。但其詞書。其歌によりていはでかなはざることあるは。其所々にしるしつ。猶委き事は。かしこにここわりたきたるを見てわきまふべし。

○此註釋にこり用ひたるは。爲家。卿の抄はさらにもいはず。顯昭法橋。契沖阿闍梨の。記しれかれたるものごもをはじめ。古き記錄。或はこれかれの物語書なご。はた近き世人の著したる書なごまで。見聞及べる限は引出て。すべて世に廣くおこなはるる書は。其作者の名をばしるさず。其書の巻なごをも委く記し。又古今の世に名高き人々の説の。寫本なごに見え。或はたゞに聞傳へたるなごは。某云ご記し。なほ舊き説なごの見聞及ばざる所々は。同じ學のはらからにもこひはかりて。其中に考へ得たりご思ふ限は擧て。又某云ご記しつ。たのが考へたる事ご。誰にても思ひよりぬべき事ごは。別(コト)に名をば記さず。さて其中に。事長き論なごは。別に記てそへたり。

○人々の説をあげたるに。縣居。大人ご記したるは。加茂。縣主眞淵。大人。鈴屋。大人ご記したるは。本居。宣長。大人。師ごいへるは。本居。大平。翁なり。其他の人々の説は。初て出せる所に。姓名ごもに記し。つぎ〳〵は名のみをしるせり。

○すべて。むねこいふべき事のかぎりは。本行に記し。今ひごきざみ委くいはまほしきによりて物したるご。ちなみにひかれて。是やかれや

と思ひよりたる事などは。細書として別(ワカ)てり。

○漢籍(カラフミ)どもに見えたる事は。いはでかなはざる事のみをものして。させる用なきふしをば。古抄などに引出られたるをも今ははぶけり。かくて。此凡例にいはまほしき事は多かれど。さまではうるさければいはず。其所々にもことわりたきたるを見て。わきまへなん物とてなり。さてかくことごとしげにはものすれども。もとより淺き學びにて。一度二度見たる書などの中には。えよくも覺えざるふしぶしもあればあやまれる事も。いひもらせる所々もあらんかし。そは後々にも。なほ考へ正してんかし。此新抄かきはじめたるゆゑよしは。師のはし書に見えたるが如し。

文化九年四月十八日　　中山美石

後撰和歌集卷第一新抄

中山美石著

春歌上

正月一日イ
元日に。二條のきさいの宮にて。しろきたほうちぎを給はりて。

○二條后は。清和天皇后。贈太政大臣長良(ナガラ)公女。高子ときこゆ。扶桑略記。朝野群載。日本紀略などに。委く見えたり。たほうちぎは。河海抄桐壺。又。末摘花ノ卷云。一說。袿(ウチギ)有大小。着衣上云々。うはぎのうへに。うちぎを着(キル)なり。いろがさねは。きぬにしたがふ。長さ小袖とひとし。中へうらあり云々。男女共に着之(ルヲ)歟。或說云。女房は。貴人着(チヤク)するなり云々。又。花鳥餘情桐壺。又。末摘花ノ卷に。袿(ウチギ)に大小あり。小袿は。宮。一の人。或は。あるじのきる物なり。きぬの上に表裳(ウハモキ)着。

其上にうちぎを着(チヤク)す云々。小うちぎは。女房のきる物なりなど見えたり。

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春來にけりとたごろかれぬる

○河海抄初音ノ卷云。みのしろ衣は。簑(ミノ)の代(カハリ)に用たる心なり。下羈旅卷「山里は草葉の露もしげからんみのしろ衣ぬはずともきよ」。又。初音卷詞。源氏物語は。卷々の名なども。人のよくしれる事なれば。ことさらに。源氏物語の某ノ卷といはずして。卷の名のみをいへり。云。「かはぎぬはいとよし。山伏のみのしろごろもに。ゆづり給ひてあへなん」とあるなども。皆簑の代の意なり。石原正明云。簑代衣は。雨衣(アマギヌ)といふ。今合羽(カツパ)と云物なり。平絹に蠟を引たるものなり。雨衣といふ文字。台記仁車記などに見えたり。かくて。此歌にては。白衣(シロゴロモ)と云を。簑代(ミノシロ)にいひかけて。うち着つゝといふ詞に。袿をかけたるなり。さて一首の意は。今たゞいま。此雪のつもれるが如き。白き大袿をかづきながら。是ぞ我身の上に。御惠の春の來(キタ)りしなりける。かゝる御惠などにあはんとは。思ひよらざりしものをと。驚かれぬるよとなり。ふる雪のは。簑代といはん料ながら。其時のさまにてもあるべし。三句。つゝの詞は。末句の。驚かれぬるにかけて心得べし。此歌。上にぞ文字などのてにをはなくて。ぬるととぢめたるは。鈴屋大人。詞の玉の緒に。變格と出されたり。玉の緒(卷二、十丁)云。終りの句に。歎息の意ありて。留りの下に。かな又よなどいふ辭を加へて聞く意なり云々。源氏(藤ばかま)「いもせ山ふかき道をば尋ずてをだえの橋にふみ迷ひける」。此歌につゞきたる詞に。「よとうらむるも」云々と有り。ふみまどひけるよといふ意なればなり。是にていづれも准へしるべしとあり。

此變格といふ物の事。聊考へたる事あれども事長ければ。追考に出せり。

春立日よめる。

凡河内躬恒

春たつときゝつるからに春日山きえあへぬ雪のはなと見ゆらむ

○春がたちしときくと其まゝに。春日山に消殘てある雪が。花と見ゆる事哉いかでかく花とは見ゆるならんとなり。聞つるからにの。からにといふ詞は。俗言に。聞クヤイナヤなといふに近し。消あへぬは。消エオホセヌといふこころなりかくて。春にならば。花を見んとのみ思ひ居つれば。かくはあるにやといふ意も。ふくみて聞ゆるなり。古今春上「心ざしふかくそめてしをりければ消あへぬ雪の花と見ゆらん」。此歌などのてにをはの事。玉緒(卷六)にいはれたるが如く。らんとは結びたれども。其事を疑ふにはあらず然るゆゑを疑へるてにをはなり。さるゆゑに皆かなといふに通へり。右に引たる。古今の歌にていはゞ。消あへぬ雪の花と見ゆる。其事は疑ひにあらねば。「花と見ゆるかな」といふ意なるを。さやうにはなと見ゆるゆゑを疑ひて。何とて花とは見ゆらんと云意にて。らんとは結べり。然れば。「花と見ゆるかな。何とて花と見ゆらん」と云意なり。此格は。上にそ。や。何などのてにをはなくて。用語のの文字よりかゝりて。らんと結びたると。二の句三の句などの終に。を文字にもじなどの辭(テニヲハ)有て。らんと結びたるとに多し。古今(春上)「春の色のいたり至らぬ里はあらじさけるさかざる花の見ゆらん」。同(夏)「郭公われ

用語の文字とは。消あへぬ雪のの文字なり。此のもじ。俗にはがといふなり。

とはなしに卯花のうき世の中に鳴渡るらん」などの如し。委くは。玉緒を見て心得べし。

兼盛王

けふよりはをぎのやけ原かきわけて若葉つみにとたれをさそはん

○歌の意明らかなり。末句は。其事をいたく興ある事に思へる意なり。兼盛集「もろともに我をる宿の梅の花あかぬにほひを誰に見せまし」。重之集「初霜のたかぬだにこきもみぢ葉の色のさかりをたれに見せまし」などの類なり。此歌。大和物語には。む月ついたちごろ。かねもり。大納言殿にまゐりたりけるに。物などのたまはせで。すゞろに歌よめとのたまひければ。ふとよみたりける。「けふよりは云々」とあり。荻の燒原は。拾遺雜春「春日野のをぎの燒はらあさるとも見えぬなき名をたほすなるかな」なども見えたり。此集やはじめならん。

つかね緒云。或人の許に。にひまゐりの女。月日久しく經て。むつきのついたちごろ。まへゆるされたりけるに。雨のふるを見て。

ある人のもとに。にひまゐりの女の侍けるが。月日ひさしくへて。む月のついたちごろ。まへゆるされたりけるに。雨のふるを見て。

○にひまゐりは。新參なり。さて此詞書。もしよみ人の名を擧たる歌のならば。にひ參りの女の侍けるがとは。書くまじき例なり。卽ちその人の歌なればなり。然れども。名をあげずして。たゞ女。或は男。或はたや。或はむすめなどいへる詞書は。かやうにも書く例なれば。是は難にはあらざるを。なほの侍けるがと云詞はのぞくべきなりと。詞ののつかねをに見えたり。

よみ人しらず

しらくものうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

○うへとは。上日の事。俗につとめ日といふ。新參のほど。とばかり局にありて。さて主君のまへゆるされたるなりと。正明いへり。詞書の。まへゆるさるといへる。則ち此ことなり。かく主君の前に出る事をゆるされたるにて。月日久しく經たるかひありとしれりとなり。春雨のと。枕言のやうにたきて。降るを經るにいひかけたり。詞花冬「もろともに山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずや」とあるなども。あはせてしるべし。

朱雀院の。子日にたはしましけるに。さはることと侍て。え

つかうまつらずして。延光朝臣に遣しける。

○朱雀院は。すざくのゐんとよむ。累代の後院と。拾芥抄にも見えて。たりねの帝のたましますところなり。されどこゝにいへるは。寛平法皇の御事をさし奉るなり。つかうまつるは。仕へ奉るを。音便にいへるなり。延光朝臣は。此ころ。院の執事などにやありけん。下春中巻なる。大將の御息所の詞書朱雀院の櫻の。おもしろき事と。延光朝臣のかたり侍ければ云々。などのさまも。人よりことに。此院に參られたるやうに聞ゆれはなり。猶よく考ふべし。さて。子日の遊には。小松を引くと。若菜を摘むと。二つの事をすることなり。但若菜なつむのみは。いつとさだまりもなく。春の野の遊びのわざなれども。子日の遊といふ時は。必ず小松と若菜と。相離れざるなり。古く歌にも物語書にも見えたる。皆同じ。若菜巻「小松原末のよはひに引かれてや野べの若菜も年をつむべき」など。其時のさまをも思ひ合すべし。こは。後世に。子日には。小松をひく事のみの如く。心得あやまれる人もあめれば。ことさらにはいふなり。かくて。子日の遊に小松を引くことは。昔は松葉を食ひしものなり。十二種の藥の一種にて。年中行事秘抄。猶何くれの書に見えたり。今も食ふといふ。信濃國。小縣郡の人の。物語なりと。正明云へり。

左大臣

松もひき若菜もつますなりぬるをいつしかさくらはやもさかなむ

○初二句は。松も引かず。若菜も摘まずと云事なり。かくさはる事有て。今日の御供にもつかへまつらねば。松もひかず。若菜もつまずなりて。心やらんかたなし。櫻だに咲かば。花を見てなぐさまんを。櫻はいつかさくべき。早くもさけかしとなり。此初の句の如きてにをはは。萬葉十七長歌に。萩の花。にほへる宿を。朝庭に。出立ならし。夕庭に。ふみたひらけず。云々とあるも。朝にも出たちならさず。ゆふべにも踏たひらけずと。いふ事なり。又蜻蛉日記中巻に。身をすてゝうきをもしらぬ旅だにも山路にふかく思ひこそ入れ。これも。身をすてもせず。憂きをも知らぬと云意なり。

院御返し

まつにくる人しなければ春の野の若菜もなにもかひなかりけり

○初二御句は。左大臣殿に。其許が來られざればとのたまふ御意なり。下御句は。小松引若菜摘などすべて今日の御幸の何事もはえなくして。興ありとはたほさぬとなり。季吟法印抄に。何もはたしこめたる義なりといへるがごとし。貫之集「わがゆかでたゞにしあれば春の野のわかなも何もかへり來にけり」。さて初の御句は。待を松

にひゞかせてのたまはせしなるべし。

子日に。男のもとより。けふは小松ひきになん。△野べにイ△まかり出るといへりければ。　よみ人しらず

きみのみや野べに小松をひきにゆく我もかたみにつまんわか菜を

○君ばかり小松を引に行給ふにや。我をもさそひ給はゞ。我もとも〴〵にゆきて。たがひにつまん物をといふを。若菜を摘入る器の。籠(カタミ)にいひかけたるなり。末句のをもじ力(チカラ)ありて。怨る意こもれり。さて。此歌などは。戀の部に入るべきさまなり。此類。以下の卷々にもをり〳〵有て。これ此集のくせなり。部立。歌の次序などには。あながちになづむべからず。

題しらず

霞たつかすがの野べのわかなにもなり見てしがな人もつむやと

○もし思ふ人の。我をひきつむや。野べの若菜になりて。つまれて見たき物なり。若菜は。誰にてもつむ物なればといふなり。つむとは。俗の諺に我身をつめりてなどいふ俗には。つめるとも。つめきるともいふ。に同じく。指にてひきつむことなり。人をひきつむは。けさうじ戯

るゝをりのわざなり。そを若菜を摘むにいひかけたり。初句。霞立は。春日の枕辭なり。さて。此歌は。古今集。誹諧歌の部に。寛平御時。后宮の歌合の歌。藤原興風「春霞たなびく野べの」云々とて載せられたり。げに一首の意。誹諧歌と聞えたり。

子日しにまかりける人の許に。たくれ侍て遣しける。　みつね

春の野に心をだにもやらぬ身はわか菜はつまで年をこそつめ

○春の野に。我此身のゆかぬのみならず。心をまでもやらぬ身は。若菜をばつまずして。たゞ年を積(ツム)のみぞとなり。心をやるとは。俗に氣(キ)を晴(ハ)らすといふに同じ。それを今は。ひきこもり居る事にいひかけて。さて若菜はつまで云々と。たゝかはせられたり。心をやるとよみたる歌は。萬葉卷十「春の野に心やらんと思ふどちきたりし今日はくれずもあらぬか」。後拾遺春上正月子日。庭にたりて。松など手ずさびに引侍けるを見てよめる。「春の野に出ぬ子の日はもろ人の心ばかりをやるにぞ有ける」。など猶あり。さて此歌。若菜はつまでといふを。若き意にいひかけたるならんかと。我友夏目甕麿いへり。げに然らんか。拾遺春上に。「春日野に多くの年はつみつれど老せぬ物は若菜な

りけり」とあるなどは。若き意にかけていへればなり。

宇多院に子日せんとありければ式部卿みこをさそふとて。

行明親王

○式部卿のみこは。御諱は重明と申て。行明親王の御兄みこなり。此親王の御事榮花物語にも見えたり。行明親王は。上總大守。延喜第二。實は寛平第十の御子と。作者部類にも見えたり。されば。御祖父實は御父帝。宇多上皇の大ましますの御庭にて。子日の御遊あらんとてといふ事なるべし。

ふるさとの野べ見にゆくといふなるをいざもろともに若菜つみてん

○一首の御意は。かくれたる所なし。御父帝の大ましますの所なれば。故郷とはのたまへるなるべし。子日の御遊には。小松引若菜摘。ともに野べにてのわざなれば。今は御庭にて御遊はありとも。御歌にはかくのたまはすべき事なり。季吟抄には。宇多院は西京なれば。古里の野べ見にゆくとなりといへり。此説もすてがたし。其意ならんには。野の御幸もありしにや。そはしりがたし。

はつ春の歌とて

紀友則

水のおもにあや吹みだる春風や池のこほりをけふはとくらん

○水の面に模様をなす風が。春立つれば。今日は池の氷を。ふきとかすにてあらんとなるべし。上二句は。春風の常をいへり。氷盡開。といふ句によられたるにやと見ゆれど。此詩は。氷のとけたるを見たる意なり。此歌は。時節に感じて。思ひやりたる意と聞ゆれば。いさゝかかはれり。但。此歌をも。三四五一二と。句を次第して見れば。詩句の如くに聞ゆれども。さては歌ざまたとるやうなり。伊勢集に。水のおもにあやおりみだる春雨や山のみどりをなべてそむらん」此歌のつゞけをも思ふべし。

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

○寛平は。宇多天皇の御時の年號なり。御時を。おほんときとよむは。大御時を音便にてとなふるなり。すべて。天皇の御事には。大御代。大御食など。御の字の上に。大はがめ奉るなり。よりて。天皇の御事の外といふ言をそへてあり。きさいの宮は。后宮をきさいの宮となふるも。音便なり。七條后溫子と聞えて。昭宣公の女なり。契冲阿闍梨古今集餘材抄云。袋草紙云。仁和四年。十月六日。入內。菅

家萬葉集、序に。寛平五年とあれば。歌合はそれよりさきなるべし。立后は。九年なれは。初にめぐらして。后の宮とはいへり。縣居大人云。此宮の歌合の歌ども。新撰萬葉集（即菅家万葉なり。）に有を。此集（古今を云なり。）には採られしなり。此時の歌ども。ことによろしく聞ゆ。歌合は。歌よむ人を左右に立て。勝負を定（サタ）せらる。其歌を。洲濱（スハマ）などの作り物にもつけ。又つくりものゝ水などにも書つけ。さま〴〵の風流（ミヤビ）をつくして。遊ばせ給ふなり。歌合の記と云物に見えたりと（古今集打聽に）いはれたり。然れば。今此（後撰）集に載せられたるも。同じことなり。

よみ人しらず

ふく風や春たちきぬとつげつらん枝にこもれる花咲にけり

○春が立たるぞと。花の木に、風が告（ツゲ）しらせやしつらん。枝の中に隱（コモリ）て有し。花が開出（サキイデ）たるよとなり。春たちきぬは。春立來（キ）ぬなり。さて。花は。廣く春咲花をさしていふなるべし。後世に。花といへば。櫻ぞと心得るとはかはれり。古今集此集ともに。櫻の歌は。大かた櫻とよめり。又花とよみたるには。詞書に櫻とことわれり。

しはすばかりに。やまとへ。ことにつきてまかりけるほ

ごに。やどりて侍ける人の家の。むすめを思ひかけて侍けれども。やむごとなき事によりて。まかりのぼりにけり。あくる春。親のもとにつかはしける。

○ことにつきは、俗に用事（ヨウジ）ありてといふにおなじ。（公私の事は。詞に見えざれば。今はさだめがたし。）やむごとなきは。もとなほざりにしがたき意よりいひて。もだしがたしといふと同じくて。無止事（ナキヤムコト）なり。高き人をいふも。なほざりにしがたき意より出たるなりと。鈴屋、大人いはれたり。

みつね

春日野におふるわかなを見てしより心をつねに思ひやる哉

○かの思ひかけたるむすめを。若菜になぞらへたるのみ。春日野は。大和國なり。貫之集「あし引の山べの松をかつ見れば心を野べに思ひやるかな」。さて。此歌も。戀の部に入べき歌なり。

かれにける男のもとに。其すみけるかたの。庭の木のか

れたりける枝ををりて。遣しける。

○かれにける男とは。此作者と相馴て。此作者の許に通ひすみたるが。今は絶たるなり。すべて。男の。女の許へ通ふを。すむといふは常なり。又いにしへは。今世の如く。男の家に。女をむかへおく事は。なくて。女の許へ。男の通ひたるなり。物語書などにも。多く見えたるが如し。其すみける云々は。其男の通ひ來て。いつも居たる所の。庭の木の枯たる枝を折て。此歌をつけてやりたるなり。

兼覽王母（女イ）

もえ出るこのめを見てもねをぞなく枯にし枝の春をしらねば

○今かく春になりて。木々の芽の出るを見ても。かくの如く一度枯たる木は。春といふ事も知らで。終（ツヒ）に枯果るなり。我に離（カレ）たる人も。此枯枝の如く。二度たち歸り給ふ事はあらじと思ひて。音をなき侍るといふなり。

女の宮づかへにまかり出て侍けるに。めづらしきほどにあひ侍にければ。むつきのついたちばかりに。いひはしたりける。

かはし侍ける。

○男女の間にかけて。物いふ。又相しるなどいふは。大かたは契かたらふ事なれども。此所に。これかれ物いひなどゝいへるは。たゞ戯言などいひかけたるのみにて。女の聽（キヽイレ）入たるにはあらず。ほどもなく一人にあひ侍とある方。まことに契かたらひしことなればなり。

いつの間に霞たつらん春日野の雪だにとけぬ冬と見しまに

よみ人しらず

○春日野の雪もまだとけぬ冬ぞ〳〵と思て居るうちに。いつのまに春といふ時になりて。霞が立し事ぞといひて。さて。春になりたりとは。一人の男に逢たるをいふなり。四句の。とけぬといふ詞は。歌の裏の意。女の上にては。打とけぬなどいふに同じ意ながら。俗言にいはゞ。ヤボナ。ウチ氣ナ。などいふに近し。

題しらず

閑院左大臣（ことしみなん、六）

なほざりにをりつるものを梅の花こゝきかに我やこゝろもそめてん

○意あきらかなり。下に「梅の花よそながら見んわぎもこがとがむばかりの香にも

こそしめ」とあるをも引合せて心得べし。末句は染てんと有て、しめてんとよむべきを染字なるより、そめとは寫誤れるなるべし。色にはそめそむ、香にはしめしむしみ、しまんといふぞさだまりなる。すべてかゝる歌書などには文字にて書たるも、きはまるところは假字なれば、其書たる文字の意にはさしもなづまず。詞の方をむねとは心得てよむべきわざなり。又思ふに、戀の歌にて、初めはかりそめの戯に契つるを、終には、まことに深き中ともなりゆくべきやうに思はるゝ、いふ意の如くも聞ゆれども、いかゞあらん。

前栽にこうばいを植てゝ又の春たそく開ければ。

○前栽は、字音にてセンザイとよむなり。屋舎の前の、木草の花など、植る所の事にて、今世に庭前と云ふに同じ。此詞やゝ古くは見あたらず。伊勢物語二十三段。又古今集雑下「風ふけばおきつ白波たつた山の歌の左註に、せんざいの中にかくれて見ければと見え、河海抄桐壺に、壺前栽、清涼殿東庭井ニ西庭、朝餉井臺盤所前、被レ栽ニ前栽一延喜元年、左右衛門栽ニ草架一ヲとあるやはじめならん。源氏物語などには、あまた所に見えたり。こうばいは、紅梅なり。拾遺集物名、歌に「うぐひすの巣つくる枝ををりつればこゝをはいかでかうまんとすらん」とあるなどを以て見れば、常には字音にてよびたりと見ゆ。たそくさきければ、咲くことの遅かりければといふ事なり。集中の詞書にも例あり。

宿近くうつしてうゑしかひもなくまちごほにのみにほふ花かな

藤原イ中納言兼輔朝臣

○やど近くと、待遠とを對へて、あやとせるのみ。下夏に「ほとゝぎす來ゐる垣ねは近ながらまち遠にのみこゑの聞えぬ」とよめるもあり。見ゆる大和物語

延喜御時うためしけるに奉ける。

○延喜は、醍醐天皇の御時の年號なり。故レ此天皇を、延喜の帝とも申奉るなり。

春霞たなひきにけり久かたの月のかつらもはなやさくらん

紀貫之 今六

○春は諸木の花咲く時なるゆゑに、月の中の桂樹も、花さくやらん。其桂の花のにほひにて、かく霞むと見ゆるとなり。古今秋上「久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん」ともに其をりのけしきを見て思ひよせたるなり。月の桂は、兼名苑云、月中有レ河、河上有レ桂樹一、高五百丈云々。これより出たるなり。

むなし御時。みづし所にさぶらひけるころ。しづめるよ
しをなげきて。御らんぜさせよとこたばしくて。ある藏人（女、家集）
にたくりて侍ける十二首がうち。

○むなし御時とは。上の詞書をうけていへるなり。則延喜の御時といふ意なり。
御厨子所（ミヅシ）は。朝夕の御膳を供す。別當預（ヨリ）所衆等有云々と。拾芥抄に見えたり。し
づめりとは。官位など給はるべきほどにも給はらぬをいへるなり。藏人（クラウド）は。御
側近く侍て。小事の御取次などに仕る官なり。職原抄等に委しく見えたり。

いづこにも春の光はわかなくにまだみよし野の山は雪ふる

みつね

○君の御惠（メグミ）はあまねきことなるに。我身はいまだ其御恩澤にあづからざることよと。あやしめるなり。わかなくにはわかぬにになり。重之集「雪消ぬ我み山なる草木には春もまだこぬこゝちこそすれ」。貫之集「みよし野の吉野の山に春霞たつを見るゝ雪ぞまだふる」など皆同じ意なり。

人のもとにつかはしける。

しら玉をつゝむ袖のみながるゝは春はなみだもさえぬなりけり

伊勢

○白玉をつゝむ袖とは。涙をたさふる袖をいへるなり。古今（戀二）「つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり」の類なり。二の句のみといふ言はひたいのといふ意にて。三句流るゝはへ掛れり。袖ばかりといふ意にはあらず。さては一首の意さらに聞えず。さえぬなりけりは。石塚龍麿云。萬葉一に「磐床（イハドコ）と川の氷こゞり冷夜（サユル）を」云々とあるや。はじめならん。六帖（一ノ下。雫の歌に）「霜雪のきえてうき身のしづくこそ袖たわむまでさえかゝりけれ。（伊勢集にもあり。）夫木抄卅六。（冬戀。能因法師。）「なみだ川こひより出て流ればかく氷るよもさえぬなりけり」などあるを思ふに。水の氷るをさゆといへるなり。涙もさえぬとは。涙の流るるをいふ。冬の月をさゆるとよむも。氷の如くさえて見ゆればなりといへり。なほ。新古今（雜下に。菅贈太政大臣。）「天の原あかねさし出る光にはいづれの沼かさえ殘るべき」とあるも同じ。又。涙も氷るものゝ如くいへるは。古今（春上）「雪のうちに春は來にけり鶯のこほれる涙今やとくらん」。新古今（雜上）「年くれし涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春やたつらん」など猶あり。かくて一首の意は。袖につゝまんとする涙のつゝみあへずして。かくひたものに流るゝは。春は。氷も解けて流るゝ時なるゆゑに。我が涙も。氷ら

此歌のなどの末句。なりといふ。ことには。力こめて。其事おしはかりて思ひやるなり。深く感ずるなり。モノヲ氷ハ涙ヲ春ナラヌヤウニトイフ意。歌いづれも其のまゝにひたぶるに遣よりの語勢なり。

ずして流るゝよなといふなり。

人に忘られて侍けるころ雨のやまずふりければ。

よみ人しらず

春たちて我身ふりぬ(行イ)るながめには人の心のはなもちりけり

○春になりて。また一つ年を重ねて。我姿の段々舊(フル)くなるをわびて。物思ひをして居る頃の長雨(ナガアメ)には。梢に咲たるのみならず。思ふ人の心の花も散たるよなといふなり。實は忘られたるゆゑに物思(ナガメ)をするなれば。我身の舊(フル)ぬるゆゑに忘られたりといふ意なるを。長雨(ナガアメ)に花の散るによせていへるによりて。ながめには。人の心の云々とはうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまにを思ひてよめるにもあるべし。心の花とは。さかりに思ふ時の心はなつかしくはなくしきをいふ。古今五戀「色見えでうつろふものはよの中の人の心の花にぞありける」なども同じ。雨の降(フル)ぬるに身の舊(フル)ぬるをかけ。物思ひ俗に心苦(シン)チスルと云意を長目といふに長雨をかねたり。さてながめとは心にたもふ事などあるをりに。其さし對(カ)ひたる物を見るとはなくてたゞまもり居るやうの意なり。故(レ)ながめといへば。おほかたは物思ひのある時の事になるなり。長目の字にて大かた當れり。眺字などの意とは。卿別(ワカレ)なり。見るといふとは。いよいよ異(コト)なり。見るといふは。花にても月にても。其對ひて見る物のうへに用ありて。其物を見るをいふなり。ながめとては。其對ひたる物には用なくて。たゞじつとまもり居るをいふなり。いはゞ其對ひ居る物は。月か花か覺えはなきといふほどのことなり。但。海邊又は。遠く見渡すやうの所にて。ながめやるなどいふは。遙(ハルカ)に見やる事にて。こは眺の字の意に近し。

だいしらず

わがせこに見せんと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれゝば

○萬葉第八に。山部宿禰赤人歌四首とて出せる中の一首なり。我せこは。友をいふと。橘千蔭翁の略解に見えたり。梅の咲たるを。友どちに見せんと思ひたれど。雪のふりつもりたれば。それとも見えずなりぬとなり。縣居大人云。男どち互に吾兄子(ワガセコ)といふは。貴(タフト)び親(シタシ)めるなり。萬葉十七に。越中介繩萬呂の。守家持へ贈る歌に。和我勢古(ワガセコ)我久(ガク)爾弊麻之奈婆(ニヘマシナバ)云々とよみ。又同家持池主の贈答には。ことに安禮奈之等(アレナシトナ)奈和備和我勢故(ナワビワガセコ)云々とよみ。が如し。吾兄子(ワガセコ)といふ詞の事は。下にわぎもこと。ある所に。委くいふを引合せて心得べし。

来て見べき人もあらじな我宿のうめのはつ花をりつくしてん

○萬葉巻十に「きて見べき人もあらなくにわぎへなる梅の初花ちりぬともよし」とあるを。いさゝか引なほして。載せられたるなるべし。末句。をりつくしてんは。心のまにまにをらんといふ意なるべし。手折（タヲリ）て棄（ステ）んといふにはあらざるべし。次の歌をも見合すべし。初句の来て見べきは。来て見るべきなり。射（イキ）着（ニヒ）似（ミ）干（井）見（居）などの詞に。る文字をそへて。切るゝ詞と。つゞく詞とをかれたるは。後の定まりにて。ふるくは。万葉集十に「春野のうはぎつみて煮らしも」古今集に「花とや見らん」六帖六に「松がえのときはに似へき」後撰集に「来て見べき人もあらじな」土佐日記に「似べき」など第二の音。い。き。に。ひ。み。ぬより。切るゝ詞をうくるてにをはを。用ひたりなど。本居ノ春庭ノ翁。言葉のやちまたに。いはれたり。かゝれば。見べき。似べきなどいふは。古き詞遣ひ。る文字をそへて。見るべき。似るべきなどいへば。近世のふりの詞遣ひなり。此詞の活用（ハタラキ）の事は。初學の人には。たやすくは心得がたき事なれども。しらではかなはざる事なれば。くはしくは。やちまたを見てわきまふべし。

ここならばをりつくしてん梅の花我まつ人の来ても見なくに

○ここならばは。とても云々ならば。といふ意の詞なり。此歌にては。とてもわがまつ人の来ても見ぬに。とても此やうに来ても見ぬくらゐならば。一向に折盡さんといふ意なり。古今春下「ここならばさかずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづこゝろなし」

同別離「ここならば君とまるべくにほはなんかへすは花のうきにやはあらぬ」。同哀傷「ここならば言の葉さへも消なゝん見れば涙のたきまさりけり」。又こゝはとのみいへるは。同別離「かきくらしことはふらなん春雨にぬれ衣きせて君をとゞめん。此歌も。春雨の。とても降るほどならば。くらやみだてゝ。ひたくと降れかしといふ意なり。いづれの歌をも。よく味ひ見て心得べし。

ふく風にちらずもあらなんうめの花我かりごろもひもとよやどさん

○梅花の風にちるを見て。今宵ばかりだに散らずもあれかし。木の下に宿りて。わが狩衣に香をしめんと思へばといふにて。末句の。やどさんはやどさしめんといふ意なるべし。一夜とある詞のさまし。しか聞ゆるなり。

我やどの梅のはつ花ひるは雪よるは月かと（トモイ）見えまがふかな

○意明らかなり。初花といへるは。このごろ咲そめたる花なれば。しかいへるなり。必しも初花ならでも。心は同じ。上に「来て見べき人もあらじな」とある歌もたなじ。

梅の花よそながら見んわぎもこがこがむばかりの香にもこそしめ

○梅の花をば。遠く離れたる所のまゝにて見ん。もし近よりなば。いかなる女のうつ

り香にかと思ひて。我が妻のとがむる程の香にやしまん。さやうにてはわろきにと
ふ意なり。古今春上「梅の花たちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける」
などをも思ふべし。よそとは。遠く離れたるをいふ詞なり。戀の上にてよそになるなど
る人になるをいふなり。わぎもこは。吾妹子（ワガイモコ）の約（ツヅマリ）たるなり。仁賢紀の古註に。古者。不レ言二兄弟長幼一。女
以レ男（テヲ）稱レ兄（セト）。男以レ女（テヲ）稱レ妹（イモト）。とあるは。上つ代より。末の代まで通れる事にて。神代紀を初め。
源氏物語などにも。姉（アネ）をさして。いもうとといへる事見えたり。然れば。もとはたゞ。男
女といはんが如くなるを。近世になりては。夫妻の中をのみいふ如くはなりたるな
り。此末句の。もこそ又もぞの辭は。さきをあやぶみて。もし云々にてやあらん。さありてはよ
ろしからぬに。といふ意こもるなり。此例に違へるもまれにはあれど。そはいとまれなる
事なり。なほ委しくは。玉緒三の巻。十九のひら。五の巻三ノ枚を。見て心得べし

梅花をれば こぼれぬ我袖に にほひかうつせ家づとにせむ

素性法師

○家づとにせんとて。梅の花を手折つれば。はら〳〵と袖に散かゝりて。なほ其袖に
もたまらずなりゆくを。こぼれぬといはれたりと聞ゆ。其さま見るが如き詞なり。さ
て。せめては。我袖に匂ひなりともうつせ。其香をだに家づとにせんとなり。にほひ
かは。匂ひ香なりと。爲家卿の抄に見えたりと。季吟法印は記されたれど。今ある爲家
卿抄には見えず。竹川卷（九葉。蕭君の事をいふところ）に「げに。いと若うなまめか
しきさまして。うちふるまひ給へるにほひかなど。よの常ならず」云々と見えて。にほ
ひ香は。にほふ香をいふと。鈴屋大人もいはれたり。此にほひかといふ詞。いとめづら
しきゆゑに。心得がたきこゝちすめれど。さりとて。家集の方にては。歌ざまいたくた
とるべし。契冲阿闍梨もにほひはの誤りといはれたれど。なほ。一首の勢ひたとるさ
まなり。

をこにつきて。ほかにうつりて。　よみ人しらず

心もてをるかはあやなうめの花香をこめてだにこふ人のなき

○我心として外へうつりし事かは。我心としてうつりしにはあらず。男につきてか
くうつりたるはせんかたなきことなるに。たとひ我をばうとむとも。梅花の香をだ
に人のとひこぬはわけもなきうらめしきことかなといふ意と聞え。爲家卿の抄も
此意なりと。季吟法印の抄には記されたり。なほ詞書のさまなどには。いさゝかい
ぶかしきふしもあれど。それを論はんには。いと長々しく。さらでもひとわたりは聞え

たる歌なれば。こゝにはいはず。此歌の末句などの如く。用語ののもじよりかゝりて。き又ぬなど結びたるは。玉緒に。そ。の。や。何と出されたる中ののもじにて。變格にはあられど。なほ思ふに。そもじなどよりかゝりたるとは。いさゝか異にて。變格に近く。歎息の意を輕くふくめるやうなり。下「谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなく聲わかみ人のすさめぬ」といふ歌の所にいふをも。引合せて見るべし。

こしをへて心かけたる女の。こゝしばかりをだにまち
くらせといひけるが。又のこしもつれなかりければ。

人心うさこそまされ春たてばこまらず消るゆきかくれなん

○世にありて。うさのみまさりゆく人を見んよりは。春たてば。雪の消て無(ナ)くなるが如くに。我も世を遁れかくれんとなるべし。古今雜下に。「世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし。」拾遺雜上「うき世にはゆきかくれなでかきくもりふるは思ひのほかにもあるかな」同戀五。又新古今。「いづかたにゆきかくれなん世中に身のあればこそ人もつらけれ」など。皆世をそむきて。隱遁する事にかけていへるなり

題しらず

梅花かを吹かくる春風に心(衣、六)をそめばひとやとがめむ

○四句。心をそめばは。六帖に。衣をとある方まさるべきか。心をしむるといへる例も。新古今春上「春ごとに心をしむる花の枝にたがなほざりの袖かふれつる」などはあれど「人やとがめん」とあるには。衣の方似つかはしきやうなり。一首の意は。上の「梅花よそながら見ん」云々。古今の「人のとがむる香にぞしみける」などに同じかるべし。さて。四句そめばは。例のしめばの寫誤なるべし。

春雨のふらば野山にまじりなん梅の花がさありといふなり

○野山にまじりなん。春雨のふらば。梅の花笠がありといふなり。然らば。さしもぬる事もあらじをといふ意なり。まじりなんは。まじらんといはんが如し。此なんの詞は。上のかゝりによりて。願ふ意になると。然らざるとのけぢめあり。それらの事。末に委くいふべし。野山にまじるとは。野山をわけあそぶをいふ。竹取物語云「野山にまじりて竹をとりつゝ」云々。古今春下「いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花のかげかは」梅の花笠は。催馬樂青柳に。「あをやぎをかた糸によりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ」これをはじめにていへり。

かきくらし(うちきらし)雪はふりつゝしかすがにわぎ(我家)へのそのに鶯ぞなく(なくも、萬葉八なきつ、六)

○しかすがには然しながらにてさすがにといふも同じ。萬葉に然爲我二と書たり。下のかもじ濁るべし。わぎへは我家を約たるなり。萬葉巻八には吾宅巻五には。和止幣又和我覇とも書たれば。わがへとよまんも然るべし。一首の意は。かきくらし雪は降れども。然しながら春なれば。鶯のなくといふなり。萬葉巻十「山のまに雪はふりつゝしかすがに此川やぎはもえにけるかも」とあり。

谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなくこゑわかみ人のすさめぬ

○二つのみもじは。谷が寒さに。鳴聲が若さにといふ意なり。山高み。風をいたみ。瀬を早じ。但下(冬)に「かみな月ふりみふらずみ」云々とあるはことなり。此事は。かしこに委くいふべし。すさめぬは。見る物にていはゞ。目にもかけぬといはんが如く。聞く物ならば。耳にもとめぬといはんが如し。俗言に頓着せぬといふに近し。賞翫せぬ意なり。古今春上「山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさん」同雑上「大あらきのもりの下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし」など皆同じ。一首の意は。谷が寒さに。春は來ても。いまだ巣立得ずして。なく聲がをさなさに。誰ありて耳にとめて。鶯が鳴よと賞翫する人もなしとなるべし。又思ふに。此歌も。上にもいへるが如く。用語のもじよりかゝりて。ぬとむすびたるは末句に歎息の意ありて。人のすさめぬよ」と

いふに近きやうなり。然るときは、たゞ鶯の上をよみたる歌とも思はれず。もしは戀の歌などにて。我がいまだ人なみ〳〵にもあらぬ身ゆゑに。我いふ事などを。人の耳にもとめざるよと。我身をなげく意などにはあらじか。師云。件の説々にて。よく聞えたれど。又いさゝか思ふに。こゝわかみといふは。古今集の「春たてど花もにほはぬ山里は物うかるねに鶯ぞなく」とあると。合せて考ふるに。鶯のこゑの。いまだ心よく花やかにはなかずして。俗に。谷わたりといひて。ちゝ〳〵といふやうにうひ〳〵しくなくをいふにてもあるべし。ものうかるねも。いまだこゝろよくはなかざるをし かいへるやうに聞ゆればなり。又云。同じ古今に「はてはものうくなりぬべらなり」とあるは。こと〳〵なり。こは。大平が新説なり。とる人の心々によるべしといはれたり。

鶯のなきつる聲にさそはれて花のもとにぞ我は來にける

○白氏文集に。鶯ノ聲ニ誘引來レル花ノ下ニとあるによりたるなるべし。又重之集に。うぐひすの聲によばれてこちくれば物いはぬ花も人まねきけりともあり。

花にもまだ さかなくに鶯のなく一こゑを春と思はむ

○花もいまだ咲ぬ時節なれば。春めきたる事もなし。たゞ鶯のまれになくを。春のし

るしとは思はんとなり。古今春上「はるやとき花やれそきときゝわかん鶯だにもなかずもあるかな。」

君がため山田のさはにゑぐつむとぬれにし袖は今もかはかず（ほせど、六）

○萬葉十に「君がため山田の澤に惠具（エグ）つむと雪げの水にものすそぬれぬ」とあるによりたるなるべし。ゑぐつむとは。女萎（エグ）摘（ツム）とてなり。（とてを。ととのみいへるは。萬葉にいと多し）ゑぐは。袖中抄云。女萎（エゴ）。花すわうにさく。水邊の草なり云々。また。萬葉十一には「あしひきの山澤回（エ）具（グ）」ともよみて。東國にては。與其（ヨゴ）といひ。土佐人は。ゑぐといへり。葉は藺（ヰ）に似て小さく。根は白く。小さき芋（イモ）ありて。味少しゑぐし。俗黑くわゐといふ物の類なりと。千蔭翁略解にいはれたり。猶。縣居大人萬葉考の別記に。委くいはれたり。一首の意は。古今春上に「君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふりつゝ」といふ歌の御意に似て。其摘たる時の勞を。つよくいへるは。則君がためにと思ふ心の深きよしなり。

あひしりて侍ける人の家に。まかれりけるに。梅の木侍けり。此花さきなん時。かならずせうそこせんといひけるをれとなく侍ければ。

つかれ緒六。紀長谷雄朝臣の家にまかれりける時見けるに。梅の木侍けり。あるじ。此花咲。なむ時。かならずせうそこせんといひ侍けるを。おとなく侍ければ。

○此かへし。紀長谷雄朝臣なれば。家は。其家なるを。あひしりて侍ける人の家とあるは。ひが事なり。此たぐひ集中に多しと。つかね緒に見えたり。せうそこせんは。消息せんにて。必ずつげやらんといふことなり。れとなくは。俗言にいへば。何ノサタモナクといふ意なり。

朱雀院の兵部卿みこ

梅の花今はさかりになりぬらんたのめし人のれとづれもせぬ

○たのめしは。令頼（タノメ）しにて。頼に思はせたるなり。必ず消息せんと云ひて。我に。たのましめし人のといふ事にて。卽。長谷雄朝臣をさゝせ給ふなり。一首の御意は。彼うめの花は。もはや盛になりたるにてあらん。然るを。此花の咲たらば。必ず消息せんなどといひて。我に頼に思はせたる人の。何のれとづれもせぬ事よとなり。

かへし　一本。又つかれ緒

紀一本　中納言長谷雄朝臣

春雨（風イ）にいかにぞ梅やにほふらんわが見る枝は（に、六）色もかはらず

（のいろかはるにや）

○いかにぞ。春風に梅やにほふらんと。詞をたきかへて心得べし。いかに侍るぞ。今は盛になりぬらんなど。のたまひたこせ給ふは。さては。君があたりの梅は。此ごろの風に。にほひ侍るにや。此方の見て居る枝は。いまださくべきけしきも侍らず。さるゆゑに契たきたる消息も。し侍らぬなりといふ意なり。上ノ句のてにをはゝ。玉緒巻三の。十六。十七のひらに「疑ひて問かくるぞと出されて云く。これは。必上に。何等の辭をおきて。そと切るなり。後撰一「春風にいかにそ」云々。拾遺二十「こゝにだにつれ〳〵となく時鳥ましてこゝひの杜はいかにそ」同十二「ゆめかとも思ふべけれどれやはせし何そ心にわすれがたきは」などあるを見てしるべし。されば此歌も「いかにぞ」と切て「梅やにほふらん」と結びたるなり。

春の日。ここのついでありてよめる。

よみ人しらず

うめの花ちるてふなべに春雨のふりでつゝなくうぐひすのこゑ

○ちるてふの。てふの詞も。といふの約すべて。てふは。といふの約なり。戀すてふにて。このも。異る事はなけれど。なほ此歌に遣へるさまは。いとかろく。助辭（ヤスメコトバ）などいはんが如く聞ゆ。俗言にも。といふといふ言を。いと輕くつかふ事ある類なるべし。たとはゞ。火はあつき物ぞと云ふを。火といふ物は。あつき物ぞといふ類なり。されど。かくいと輕く添へていへるも。猶しかいふべき所有て。其そへたるとは。添へざるとは。語勢異なれば。意もまたいさゝかことなるなり。こはすべての詞遣ひに。皆ある事なり。こはまことには。いと大事のことにて。なほざりにすべきにはあらねど。初學のほどには。さばかりのふしまでは。及びがたきものなれば。今は。心得やすからん方につきて。一わたり大らかにいひおくなり。委くは。末にいふを見て心得べし。又。詞の延約（ノベツヅメ）。助辭などいふも。まことはいと心ゆかぬ事にて。おのれ別に論あれども。これはた事長ければ。末にいふべし。しばらく人の耳なれたる筋にて。心得やすかめるにつきて。なべには。並にて。これとかれと。ならぶ時にいふ言延約などいふ事。上の條に同じ（ナラブ）

なりと。横井千秋翁の遠鏡にいへるが如し。古今秋上に「日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける」など皆同じ。四句。ふりでつゝは。詞のさま少しいかにぞや聞ゆ。こはふり出ての寫誤なるべし。六帖にも。ふりいでゝとあればなり。但ふり出つゝといふ詞も。なきにはあらず。古今戀二「くれなゐのふり出つゝなく涙にはたもとのみこそいろまさりけれ」などは見えたり。さて。ふり出てにても。ふり出つゝにても。意は異らず。聲をあげて鳴く事をいへるなり。古今夏「思ひ出るときはの山のほとゝぎすからくれなゐのふり出てぞなく。又鶯によみたるは。蜻蛉日記上巻「しられねば身をうぐひすのふり出て鳴てこそゆけ野にも山にも」など猶あり。一首の意は。梅花の散るにつれて。聲をあげて鶯のなくといひて。さは。鶯も。花のちるををしみてなくと見ゆ。といふをふくめたるなり。古今春下に「しるしなき音をもなくかなうぐひすのこゑしのみちる花ならなくに」などあるをも引合せて思

ふべし。三句は。四句をふり出てといはん料に。春雨のと。枕言のやうにおきて。さて春雨に花のうつろふ事にひゞかせたるなり。

かよひすみ侍ける人の。家の前なる。柳を思ひやりて。

みつね

いもがいへのはひ入にたてる青柳に今やなくらんうぐひすのこゑ

○僻按抄云。はひ入に立るは。門のいり口をよめると聞ゆ云々。鈴屋大人（古事紀傳。十二ノ巻ノ四十八葉に）云。後撰集云々。堀川百首にも「柴の屋の波比理の庭におくか火の煙うるさき夏の夕くれ」是らを思ふに。門より。舍屋内に入までの間の庭を。波比入と云しなり。古言なるべし。波比入とは。たゞ歩入にて。今世の言にも。入を。波比流と云これなり。波布とは。いさゝかの間の處を。歩き行くことなり。故。源氏物語などに。家内などにて。彼より此所へ來ることなどを。波比渡など多く云り云々。此波比入は。古へ然るべき家にては。大庭と云ひ。今の世には。玄關前。白洲などいふなる所なれば云々と。いと委くいはれたり。これにて明らかなり。猶夫木集（春三）にも。「見にとくる人だにもなし我宿のはひりの柳下はらへども」などいふも見えたれど。此集によみたるやはじめならん。かくて一首の意は。詞書と合せて見れは。解を待たず。

松のもとに。これかれはべりて。花を見やりて。

坂上是則

ふかみどりときはの松のかげにゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

○松のときはなるを。めでたる意のみと聞ゆ。なほ次に「花の色はちらぬ間ばかり」云云とあるをも。合せて心得べし。かくて一首の意はよく聞ゆれども。花をむげにいひ朽したる趣意は。（こは。あるまじきにもあらねど。猶。）ゆゑありげに思はる。此歌。六帖には。松の題に入。家集には。鶯。亭子院の歌合に。「きつゝのみなくうぐひすのふる里はちりにし梅の花にざりける」松。松のもとに。これかれ侍りて。「ふかみどり」云々。夏。ほとゝぎす。「山がつと人はいへども時鳥まづ初聲は我のみぞきく」と。三首ついでゝ。さて其前後にも。同じ歌合にとて。多く見えたる中に。繪題と聞ゆる歌。をり〳〵見えたれば。此歌も。御屏風の繪などをよまれたるにはあらじか。もし然らば。祝の心などをふくめてよまれたらんも。しりがたし。ざれど。こはたしかなるよりどころもなければ試にいふのみ。ついでに云。ときはとは。常磐の意にて。磐の常なるが如く。うごきなく。とこしへなる意。又。とこはと云詞あり。そは。万葉巻六に「橘は實さへ花さへ其葉

さへ枝に霜ふれどいや常葉之樹（トコハノキ）とあるにて。常葉とは。字の如く。常に枯ぬをいふなり。されば。松なども。此常葉の方なるを。やゝ古くより。ときはといひきたれるは。混（マギ）れたるなりと。はやく縣居ノ大人なども。いはれたり。

たなじこゝろをよめる。一本。　藤原雅正（惟、一本）

花の色はちらぬまばかりふるさとにつねには松（も）のみ（ぞ、貫之集）ごりなりけり

○此歌。貫之集には。天慶三年。四月。右大將殿御屏風の歌。廿首。人の家にこうばいあり。「紅にいろをばかへて」云々。（次下に出たる歌なり。）女。柳を見る。「青柳のまゆにこもれる糸なれど春のくるにや色まさるらん」ふるさとにいたれり。「花のいろは」云々とあり。かくては。三句ふるさとにといふ事も。よせあり。さて。これにつゞきたる（家集の）歌に。祝の心をふくめられたるがあれば。此歌にもさる心しらひあるべくや。

紅梅の花を見て。　みつね

くれなゐに色をばかへて梅のはな香ぞこと〳〵ににほはざりける

○色をば紅にかへつれど。香は白梅に異らずとなり。後拾遺（春上）「うめの花香はことことににほはねどうすくこくこそいろはさきけれ」。月詣集に。紅梅白梅にほひことならずといふ事をよめる。賀茂ノ成助「梅のはないろこと〳〵に見ゆれどもにほひはわかぬ物にぞ有ける」なども見えたり。こと〳〵にには。別々（コトヽ）にて。俗に。別々（ベツヽ）にといふに同じ。

これかれまとゐして。酒たうべけるまへに。梅の花に。ゆきのふりかゝりけるを。

○まとゐは。圓居（マトヰ）なり。酒たうべは。酒給（タベ）にて。卽飲（ノ）むことなり。催馬樂の。呂の歌に。酒飲（サケタウベ）「さけをたうべて。たべゑうて」とあり。（たべを。たうべといふは。音便なり。）今の世の俗にも。飲食ともに。うやまふべき人に對ひていふ時は。給（タ）べ云々といふに同じ。（されど。こは飲食する事をいふは。あたらぬ詞なり。もとは。其飲食を。給はることをいひたるよりうつりてのことなるべし。）

貫之

ふる雪はかつもけなゝんうめの花ちるにまごはずをりてかざゝん

○ふる雪は。ふり〳〵。かたへ（片方）より消よかし。さては。梅の花のちるにまがはずして。咲てある事をたしかに見て。折てかざゝんとなり。かつといふ詞は。此事をしながら

彼事をもし。或は。此事のあるに。かの事のまじはるやうの所につかふ詞なりと、玉霰に。鈴屋大人の。わきまへられたるが如し。伊勢物語二十二段。又。新古今「うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつゝなほぞ戀しき」など皆同じ。けなゝんは。消(キエ)なゝんなり。消なのなは。畢(ヌ)の活用(ハタラ)きたるにて。消果(キエハテ)よといはんが如し。故消(レキエ)んなといふとは異なり。こは。な。に。ぬとはたらく詞にて。散にし花。入ぬる月などいふ。に。ぬも同じ。なんは。いはゆる願ひのなんなり。此事は。末にいふべし。

つかれ緒云。兼輔朝臣の。ねやのまへに。紅梅を植て侍けるを。みとせばかりの後。花さきける時に。かの家にまかれりけるに。女どもそのえだを折て。みすのうちより。これはいかゞといひ出して侍ければ。

兼輔朝臣の。ねやのまへに。紅梅をうゑて侍けるをみとせばかりの後。花さきなどしけるを。女ども。その枝ををりて。みすのうちより。これはいかゞと。いひ出して侍ければ。

春ごとにさきまさるべき花なればことしをもまだあかずとぞ見るはじめて。宰相になりて侍けるとしになん。

○なほ昇進あるべき兼輔卿なれは。宰相にても。不足(アカズ)思ふといふなり。左の註にてよく聞えたり。四句。まだは。未(イマダ)なり。宰相は。此所にては。參議をさしていへるなり。正明云。大臣以下。參議以上は。宰相なるに。參議をしも宰相とよぶは。宰相を規模とするゆゑなり云々。猶委くは。別記にいふべし。

此詞書今くはへたる詞なくては。ことたらぬこゝちす云々。

後撰和歌集卷第二新抄

中山美石著

春歌中

こしたいて後。うめの花（木を、一本）うゑて。あくる年の春。思ふことゝ
ろありて

藤原扶幹朝臣

うゑし時花見んとこしもたもはぬにさきちる見ればよはひ老にけり

○老後に植たれば。必ず花を待見んとも思はざりしに。今年の春。咲きつ散りつするを見れば。まことに思ひの外になが らへて居たる事よとなり。老と云ふに。年の重なりたる意をふくめたるなり。古今（秋下）に「うゑし時花まち遠にありし菊うつろふ秋にあはんとや見し」とあるなどの類なり。

後撰和歌集卷第一新抄 終

ねやの前に竹のある所にやどり侍て。

藤原伊衡朝臣

竹近く夜ごこ寐はせじうぐひすのなく聲きけば朝いせられず

○よどこ寐は夜床寢なり。朝いは朝睡なり。俗には朝寐といへども寐といふは臥こ
となり。いといふは俗に寐入といふことなり。俗言に寐ごいといふ事を物語などにいぎたなしとあるにて心得べし。いもねぬ。
いなやすくぬるなどのいの詞すべておなじ。されど此歌の下の句も俗言にいへば鶯のなく聲をきけば朝
寐がならぬと云意なり。雅言にては。いといひねといふに。かはりめなければなりさて此歌の詞書に。
鶯のなく事をいはざるは歌によづりたるなり古今春上に雪の木にふりかゝれるをよめると詞書ありて「春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯のなく」とある類にて心して書たる物なり。

やまこの。ふるの山をまかるこて。

○まかるとては通るとていふ意なり。まかるといふ詞はもとは公に出るを。公より退く所謂退朝をいふなれども今の京となりての詞にはすべて京にまれゐ
なかにまれかなたこなたの。尊卑上下にはかゝはらず。あなたへゆくを。まかるといひ。こなたへ來るを。まうでといへる事になりたるなり。これかれの集の詞書にも物語書などにも常に多き詞なり。例を考へわたして知べしと。鈴屋大人もいはれたり。さて。それより又うつりて。たゞ通り過る事をも。かくざまに。まかるといふ事とはなりたるなるべし。されど。山をば。越ゆといふぞ正しき詞なる。

いそのかみふるの山邊のさくら花うゑけんこきをしるひこぞなき

僧正遍昭

○地名の布留を。古き意にいひなして。さて。古きといふ山の櫻なれば。植けん時を云々となり。大和國山邊郡石上に布留社のあるによりて地名となり。それより。古き事にも。雨の降るにも。いそのかみふるといひかくる事になりたるよし。冠辭考などにも見えたり。

花山にて。道俗さけたうべけるをりに。

人々、家集

○はな山は。此ころ遍昭の居られたる所なり。古今春下に「志賀よりかへりける女どもの。花山に入て。藤の花のもとに立よりて。かへりけるによみてたくりける。

僧正遍昭。よそに見て歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも」とある
も。此所に居られたればなり。纘古今集哀傷に「花山にまかりたりけるに。僧正遍昭の
室の趾の櫻。ちりけるを見て」といふ。詞書も見えたり。

やまもりはいはぐいはなんたかさごのをのへの櫻をりてかざゝむ

素性法師

○此山の主師遍昭のとがめばとがめられよ。たとひとがめらるとも。此山の櫻を。見て
のみは不足（アカ）ざれば。折てかざゝんとなり。二句は。答（トガ）めいふことなりそをたぐいふ
とのみいひたるは下春に「一とせにふたゝびさかぬ花なればうべちることを人は
いひけり」。又秋下詞書に「菊の花をゝれりとて。人のいひ侍けれ（ば）」とあるなど。皆たなじ。
高砂は。地名にはあらず。たゞ山の事なり。高いさごの略。舊説に。山の總名なりといへ
る。宜。近世に。播磨國の名所とのみ心得居る人もあるは。非なり。尾とは。山のさきの。なだらかにくだりたる方をい
ふ。漢籍（カラブミ）戰國策に「昔王季歷。葬（ル）於楚山之尾（ニ）」とある註に「尾猶（ハゴトシ）末也」と有を。引合せて見れ
は。よく心得らるゝなり。されは。尾上と云ふは。山の下りたる末より。嶺のあたりまで
をいひ。卽ち峯の事にもいへり。

たもしろきさくらをりて。友だちのつかはしたりけ
れば。

つかれ緒云。友だちにて。伊勢が。おもしろきさくらを折て。おこせたりけれ（ば）

○此かへし。伊勢なれば。いせがとこそあるべきに。友だちとのみいへるは。例の
たがへり。又。たこせといふべきを。つかはしといへるもわろし。すべて。其歌のよ
み人の方へ。他（ホカ）よりたこせるをつかはしと書るところいとたほかる。こは。他の
集にも例はあれど。なほ正しからず。つかはすとは。他へやるをこそいへ。こなた
へたこせるを。いかでかさはいはんと。つかね緒に記されたり。

よみ人しらず

さくら花いろはひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

○抄云。櫻はいづれもひとしく。かはらぬ枝なれど。形見など思ひて見れば。其人戀し
くてなぐさまずとなり。師云。抄の説にて。一わたり聞えはすれど。猶委くいはゞ。
今かくをりてたくり給へる。此櫻花を見れば。うるはしく。世にすぐれたる色あひ枝
つきなれば。君とひとしくなずらへられて。これを君がかたみと思へど。かたみは。そ
の人のかはりに見る物なれど。やがて此枝に君がことが思ひ出されて。かたみと見

るにつけて。心はなぐさまずして。物思ひがせらるゝ事よといへるなり。抄に。いづれもひとしくかはらぬ枝なれどゝいへるは。くはしからず。形見など思ひて見れば。其人戀しくてなぐさまずといへるはよろし。

返し

伊勢

見ぬ人のかたみがてらはをらざりき身になぞらへる花にしあらねば（すらふる色、六帖　すらへる色、家集）

○抄云。我は形見とてはまゐらせず我身などになぞらふる花ならねばとなりとあり。此説の如し。猶くはしくいはゞ。かたみといふ物は。その人を見ぬをり。なずらへて見るにしばしは心もなぐさむことなれど。此花は。わが身のかたみがてらには。をりて參らせたるにはあらざりし。もとよりわが身などにひとしき花にはサあらねばといへるなりと。師翁いはれたり。

さくらの花をよめる

よみ人しらず

ふくかせをならしのやまの櫻花のごけくぞ見るちらじとおもへば

○契沖法師云。萬葉巻十に「吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不深刀爾」此歌を。拾遺戀三には。第二の句。ならしのをかのとあるをかのといへり。なこしをなだらかに書たるを。後の人。ならしと寫なせるなるべし。是によりて思ふに。今の歌も。風をな吹こしそと。いさむる山の名なれば。ちらじと思ふゆゑにのどかに見るとはよめるなるべし。源義家朝臣の。「吹風をなこその關と思へども」と。よまれたるに同じかるべし。然るに。これも又。ならしとうつしあやまれるか。ならしの岡も。大和にあれば。ならしの山もあるべきを。風をならすとは。少し心得がたきにや。又萬葉七に。「わがせこをこちこせ山」とよめるは。大和。高市。郡巨勢山なり。第三に。「さゞれ波いそこせぢ」とつゞけたるも。同所なるに。磯越道と書たれば。こせ山をなこせの山とつゞけていへるなるべしといはれたり。きはめて此説の如くなるべし。なこしの山は。八雲御抄等にも見えたり。

前栽に竹の中にさくらのさきたるを見て。

坂上是則

さくらはなけふよく見てんくれ竹の一よのほごにちりもこそすれ（よのまの、家集）

○一首の意。明らかなり。

題しらず

よみ人しらず

さくら花にほふこもなく春くれば何なごかなげきのこげりのみする

○春になれば櫻の花が見事に色よく咲て櫻の花は春になりたるかひあることなれど。わが身はうき物思ひのありて櫻の花のやうに花やぐ心もなく。たゞうき身のなげき事のみしげる事かな何とて此やうに物思ひをのみする事ぞとなり。なげきといふに木をかねたる事つねに多し。以下の巻々にも例多くあるなり。木のしげるも春の事なればかくよめるなり。此歌伊勢家集には「春。物思ひけるに」と詞書あり。

貞觀の御時。ゆみのわざつかうまつりけるに。

○貞觀はデーヤウクーワンとよむ。清和天皇の御時の年號なり。弓のわざは抄に。融公。近衞づかさなりしころにやといへるさることなるべし。

河原左大臣

けふ櫻しづくにわが身いざぬれんかごめにさそふかぜのこぬ間に

○花の下に弓を射ながら。雫にいざぬれんさやうにぬれなば風の吹て花は散たりとも。香は衣にとまるべければとなるべし。香ごめは。香共（トモ）にといふ事にて。俗に。香ぐるめにといふ意なり。萬葉十七に「我宿の花橘を花ごめに玉にぞあがぬくまたばくるしみ」。下春下に「根ごめに風のふきもこさなん」。又。枕草紙に。むくろごめ。五體ごめなどいふも見えたり。

家より遠き所にまかる時。前栽の櫻の花にゆひつけ侍ける。

○抄云。讃岐任國のころにや。左遷の御時などなるべし。

菅原右大臣

さくら花ぬしを忘れぬものならばふきこんかぜにことつてはせよ

○拾遺。春上「ながされ侍ける時。家の梅花を見侍て。贈太政大臣菅。こちふかばにほひこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」とあるに。もはら同じ。

春のこゝろを。

あをやぎの糸よりはへてたるはたを（は、六帖）いづれの山のうくひすかきる

○柳の。糸をよりつ延（ハヘ）つするは。鶯の着料に。機（ハタ）を織ると見ゆ。其機をば何所（イツコ）の山に居る鶯の。來て着ることぞとなり。

いせ

花のちるを見て。

凡河内躬恒

あひ思はでうつろふ色（物としりながら、六帖）を見るものを花にしられぬながめするかな

○我は。花の上を。雨につけ風につけ。やすき心もなく思ふを。花はまた。我がかく思ふかとも思はず。心のまゝに散るは。全く我が片思ひといふものなり。然らば。もはやとかく思ふべきはづはなきを。やはりまだ。花にしられもせぬ心苦（シンク）をする事かなといふなり。相思ふは。此方の思ふ如く。かなたよりも思ふ事なり。故に。相思はぬといへば。片思ひの事になるなり。萬葉巻十に。相思はであるらんこゆゑ玉の緒の長き春日を思ひくらさく」などあるも同じ。

歸鴈をきゝて。

よみ人しらず

かへるかり雲路にまごふ聲すなりかすみふきとけこのめはるかぜ（春の山風、古來風體抄）

○霞たる空に。雁の聲のたくれさきだちて聞ゆるを。雲路に迷ふと思ひよせたるなり。金葉夏「ほとゝぎす雲路にまどふ聲すなりやみだにせよ五月雨の空」など似たるいひざまなり。（なほ。新古今などにも。似たる歌は見えたり。）このめ春風は。木の芽の出るを。芽はるともいへば。木の芽のはるころの春風といふ意なり。されど歌の意にては。たゞ春風といふのみにて。木芽といふ言は。はるへいひかけん料に。枕詞のやうにおきたるなり。古今又此集などに。このめ春雨ともあり。同じつかひざまなり。

朱雀院のさくらの。たもとしろき事と。延光朝臣のかたり侍ければ。見るやうもあらましものをなど。昔を思ひ出て。

大將御息所

さきさかず我になつげそさくらはな人づてにやはきかんと思ひし

○此御息所は。延喜の女御なり。今は。延喜。帝崩御の後の御事と聞ゆ。朱雀院は。累代の後院なれば。帝もたりゐさせ給ひて。猶此院に大ましまし〳〵ほどならば。我も。其櫻を見るべき事なればかく人傳などに聞んとは思ひもかけざりし物をと。昔の思ひ出られて。いたく悲しければ。其櫻の咲たりともさかずとも。一向に其やうなるさたなどは。我にはきかする事なかれとなり。さきさかずは俗言にいはゞサカーウがサクマイがと云意なり。思ひたいもはず。ぬれぬれずちりちらずなどの類の詞づかひなり。

よみ人しらず

はるくれば木（葉、六帖）がくれたほき夕づくよたぼつかなしも花（山、一本）かげにして

○此歌。萬葉卷十に出て。初句。春されば。末句山蔭にしてとあり。ゆふづくよは。夕月夜なり。末句は。萬葉にも一本にも。山蔭にしてとある方まさるべし。一首の意は。山蔭にして春くれば木隱れ多きといふ意なり。木のしげりて。月影の障(サヘ)られがちなるを。おぼつかなくたづたづしとなり。古今旅「夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見め」

たちわたるかすみのみかは山高み見ゆるさくらのいろもひ(はイ)とつを

○山一面(イチメン)に櫻の咲つゞき。霞も一面に立わたりてあるを。山が高さに。さやかにはわからずして。皆一色に見ゆるにこそあれ。たゞ立わたりたる。霞ぞとばかり。なほざりに見るべき事かはとなり。此末句のを文字などは。なるものをといふ意なり。此歌のも「櫻のいろもひとつなる物を」といふなり。よりて。をもしに。一きは力あり。此類よく心して見るべき事なり。

大そらにおほふばかりのそでもがなはるさくはなを風にまかせじ

○おほふばかりのは。掩(オホ)ふ程のといふ意なり。さる大きなる袖だにあらば。常におほひ隔て。花を風には散らさじとなり。竹川卷に「櫻花にほひあまたにちらさじとおほふばかりの袖はありやは」などあるは。此歌によりたるなり。此歌を本歌にとりたる歌。これかれに多く見えたり。

やよひのついたちごろに。女につかはしける

なげきさへ春をしるこそわびしけれもゆとは人に見えぬものから

○諸木こそ春を知て芽の出べき事なれ。人の心のなげきといふは。實の木にあらねば。春とても。異る事はなきはづなるに。人の目に。かくもゆとは見えぬものながら。やはり我が心中のなげきも又諸木の如く。もゆる事のわびしさよとなり。されどなげきのもゆるは。目に見えぬ物なれば。かく思ひもゆとも。そなたはしらじといふ事を。ふくめたるなり。木のもゆとは。芽の出る事。なげきのもゆとは。心中に思ひこがれて。胸いたく覺ゆる事なるを。詞の同じければいひよせて。さて木の春を知るといふと。もゆといふとは。同じ事をたがひにいへるなり。

春雨のふらば(るに)思ひのきえもせで(なくて、六帖)いとゞなげきのめをもやすらむといふ。古歌の心ばへを。女にいひつかはしたりければ。

○こゝにふるうたとて「春雨の」云々。此歌は。上下ノ句の間に。いかでといふ事を加へてきく格なり。とあるは。六帖の雨の題に見えたり。

もえわたるなげきは春のさがなれば大かたにこそあはれとも見れ

○春はなべて木ノ芽の出る時なれば。なげきのもゆとのたまふも。春のならひぞと思ふゆゑに。一ト とほりにあはれとは思へど。格別(カクベツ)なることとは思ひ侍らずとなり。さがといふ詞は。ならひ。くせ。あたりまへなど。其所にしたがひて譯すべきなり。神代記に。神性を。かみさがとよみたる所ありて。契冲法師も。をり〳〵是彼に引出られたり。然れども。神代記にて。性ノ字をサガとよめるはかなふべけれども。サガの詞を。性ノ字とのみ心得ては違ふ事あるなり。古き抄物などに。漢籍。又は日本紀などの文字を引たる事多し。それが中に。まれにはあたれるもありて。一つの心得にはなるべきもあれども。多くはあたりがたくして。みだりなる事も多し。されば。ひたぶるに文字にすがる時は。詞の意を誤る事なり。こは鈴屋ノ大人もいはれ。又。縣居ノ大人の。こと葉こそ我國のあるじなれ。文字は奴(ヤツコ)なれば。いかにもつかひてん。といはれたるぞ。まことになまなまの文字ざたする人の。目さますべきことにはありける。

女のもとにつかはしける。　藤原師尹朝臣

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなるすぢにたもひよらまし

○青柳のは。いとといはん料なり。すぢ又よらましは。糸の縁語なり。三ノ句。なりゆくかはなり行哉なり。二ノ句のも文字は。俗言に譯さんには。マアと譯すべきなり。つれなくマアなりゆく事かなといふ語勢なり。一首の意は。甚(ハナハダ)つれなくマアなりゆく事かな。かくては我は。いかやうに思ひてしのばん。いかやうにも思ひよらん方なく。うらめしき事よとなり。新古今戀四「青柳のいと亂たるこの頃はひとすぢにしも思ひよられず」

衞門のみやす所の家。うづまさに侍けるに。そこの花たもしろかなりとて。をりにつかはしたりければ。きこえ△たり(△させイ)ける。

家のうづまさに侍けるに。そこの花おもしろかなりときこしめして。内よりをりにつかはしたりけるに。そへて奉るとて聞えさせたりける。衞門の御息所こは件の如く有るべきなり

○衞門ノ御息所は。上に。大將ノの御息所とあるにて。三條ノ右大臣ノ女能子と聞ゆ。御父右大臣。いまだ右衞門ノ督の時。延喜の更衣となり給ひて。衞門ノ更衣とめされ。後に御父の官すゝみ給へるによりて。大將の御息所と聞えしよしなり。太秦(ウヅマサ)は。地名にて。今の都。二條通の西なり。

御息所の歌なれば詞書のはじめに其名をいへるは。他人のごと聞えてたがへり。又次の歌御返しとあれば。これはみかどの聞しめし及びて。折につかはしたるなるに。本のまゝにてはいづこよりとも知がたし。又御かへしによるに。花を折て奉りたるなり。然るに。そへて奉るといふ詞なくては。たゞ此歌ばかりを聞えさせたるごとくなり。又作者を擧る所に其名なければ。此歌も上の藤原師尹朝臣の歌とき。こえて。いとまぎらはしと。つかれ緒に見えたり

山さとにちりなましかばさくら花にほふさかりもしられざらまし

○ちらでありつればこそ。かく花の盛をも。君にしられ奉れとなり。

御かへし

○延喜帝なり。

にほひこきはなの香もてぞしられけるうゑて見るらんひとの心は

○淺からぬ花の色香にて。植て見る人の心深さもしられたりとなり。上の「山里に散なましかば」云々には。いさゝかうらみ奉らせ給ふ御意もあるを。そはしらせ給はぬさまに。かくこたへさせ給へるにもあるべし。にほひは。花の艶などまで。廣くかゝる詞なれば。香とあるに重れるにはあらねど。此御歌にては。香文字は。いとかろく見るべきなり。

小貳につかはしける。　藤原朝忠朝臣

時しもあれはなのさかりにつらければ思はぬやまに入やしなまし（入ぬべきかな、家集）

○此贈答二首ともに。かたりつたへの誤などあるにや。つたなきさまに聞えて。ときさとす事の難き歌なり。されど試にいはゞ。春の花盛には。皆人山に入る事なるが我は君のつれなきによりて。花ゆゑにはあらで。思ひもかけぬ山に入んと思ふと。なるべきかと。師翁いはれたり。山に入といふは。世を遁れて山に入事あれば。其心もありと。横升千秋翁いへりき。

返し

我ためにたもはぬやまのたとにのみ花さかりゆくはるをうらみん

○師云。我ゆゑに。思ひがけもなき山に入給はゞ。我は其ことを音に聞て。山の花の盛を恨に思ひて。花盛のある春をのみうらみんとなるべし。春を恨んといふに。其人をうらむる心もこもれりと。千秋翁いへりき。さて。思はぬ某（ナニ）といふは。思ひもよらぬ事をいふにて。一つの詞なり。夢浮橋卷「法の師と尋る道をしるべにて思はぬ山にふみ迷ふかな」なども同じ。

題不知　宮道高風

はるの池の玉もにあそぶにほ鳥のあしのいとなきこひもするかな

○にほ鳥の足のの。の文字は。足の如くといふ意にて。これまでは。いとなきといはん

料の序なり。いとなき戀とは。休息(キウソク)する間の無きと云ふ事なり。にほ鳥のといふまでを。序と見たる説もあれども。それはひがことなり。女の許へ通ふ事などにつきて。自らの足のいとまなきをいふにはあらず童蒙抄に足のいとなきとは。水鳥の水にあるは安けれども。足をば隙なくかくなりとあるが如く。他より見る目は。さしもいそがはしげにはあらねど。心の中には。苦しき事も悲しきことも。いろ〳〵さま〴〵に。安きそらなく。いとまのなき戀をもする事かなといふ意なり。鷺鷥(ニホトリ)は。鴨に交り居て。鴨より小さし。是をかいづぶりともいへり。鷺鴨の聲とはいとことにて。ころ〳〵と長く鳴なりと冠辭考に見(ゆ)。

寛平御時。花のいろ霞にこめて見せずといふ心を。よみて奉れ。こゝにほせられければ。

○花の色霞にこめては。古今春下「花のいろは霞にこめて見せずとも香をだに遍昭ぬすめ春の山風」とある歌の事なり。

藤原興風

やま風の花の香(さそ)ふ、家集かごふもことにはるのかすみぞほだしなりける

○かどふは。今の人のかどはすといふに同じく。ぬすみていざなひ行く事なれば。ぬすむといふにかへてよめりと。縣居大人いはれたり。ほだしは刑具の桎梏(アシカセ)の。桎(テカセ)の義なり。古今雜下に「世のうきめ見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」とあるなどに同じ。一首の意は。風が花の香をぬすみいざなひて出んとする。山の麓には。立こめたる霞が。桎(ホダシ)になりて。心のまゝにはさそひ出がたからん事よとなり

題しらず

よみ人しらず

春雨の世にふりにたるこゝろにも猶あたらしくはなをこそ見(メ)れ

○春雨のはふりといはん料にて。ふりにたるは。舊(フル)くなり果(ハテ)たるなり。ふりにたるのに文字は。いはゆる。畢(ハツヌ)のぬ、の活用(ハタラキ)たるなれば。たぐふりたるといふに同じく。ふりにたるは。古くなりはてたるといふにおなじ。一首の意は。春雨に花のうつろふを見て。我がかくふり果たる心にも。雨にうつろひて。花の舊(フリ)くならんとするをば。惜(ラシ)く思ふ。我は舊(フリ)にたる身にて。花のふりゆかんとするも同類にならんとするなれば。さしも惜くは思ふまじきさまの事なれど。やはりかれを惜く思ふといふ意なり。初句。春雨のとあるは。舊(フリ)にたるといはん料ながら。其をりの見る所によしあり。あたらしくは。舊にむかへて。新の詞を趣向とせるにはあれども。そは詞のあやのみにて。歌の意にては。たゞ惜(ラシ)む意のみにいへるなり。此事は

よく心得ざれば。混(マガ)はし　あたらと　あらたとは詞のもとは違ひて。あたらは。惜む意にて。俗言にも。アーツタラ物ヂーヤなどいふに同じく。あらたは。新の意にて。漢籍(カラブミ)大學の古き訓などにも。日新なり。然れば。似たる詞なれど。もとの意はかはれり。是は荒木田久老主などもいへる事なり。然れども。上古には。此差別わかりつらめど。中古よりは。一つになりたるさまなるゆゑに。あらたといへることは。歌にも物語書などにも。をさ〳〵見あたらず。此歌などのも。全く舊と新とを趣向にとり合せたる事明らかにて集中にも猶例あり。されば。中古以來の歌をとかんには。其歌にしたがひて。心得べきなり。しひて詞のもとのみによらんは。又中々の物ぞこなひとなることもあるべし。

京極の御息所にたくり侍ける。

○此御息所は。本院の贈太政大臣時平公の女にて。褒子と聞えて。宇多天皇に參(マヰ)て。皇子(ミコ)たちをもうみ給ひたるよしなり。

春がすみたちて雲居になりゆくはかりのこゝろのかはるなるべし

○抄云。御息所のまだ院參もせで。たゞ人にてゐはしけるころ。契たきし人などの。院參し給ふころよめるなるべし云々。かりの心は。かりそめなる心といふ事にて。かはりゆく事よといふにもあるべしと。師翁いはりたり。猶試にいはゞ。此歌の作者は。もし元良親王にはあらざらんか。下五欄に「ことといできて後に。京極の御息所につかはしける。わびぬれば今はた同じなにはなる」云々といふ御歌見えたり。これ同じ御息所にたくり給へるなればなり。かく見る時は。はやくより御心を通はしてゐはせしを。内へ參給ふべきになりたるは。せんかたなきすぢながら。猶うらめしくわびしてゐるなるべし。

題しらず

ねられぬをしひて我ぬるはるの夜の夢(もイ)をうつゝになすよしもがな

○三句までは。しばらくの間といふ意をつよくいへるにて。さて。物思ひのしげさに。いもねられぬ意をふくめたるなるべし。一首の意は。物思ひのしげくて。物覺ゆるうつゝの間は。苦しくたへがたければ。さるくるしき間は。いとしばしがほどになさまほしとなるべし。又思ふに。契沖法師云。春の夜の夢はよくあふよしにあまたよ

めり。後撰に。ねられぬをしひてわがぬる」云々。又「まどろまぬかべにも人を見つる哉まさしからなん春のよの夢」新古今に。春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらばたのまん」又「枕だにしらねばいはじ見しまゝに君かたるなよ春のよの夢」又「春の夜の夢のうき橋とたえして峯にわかるゝ横雲の空」。續千載「あふ事をこよひ〳〵とたのめずは中々春の夢は見てまし」貫之集「ねられぬをしひて寐て見る春の夜の夢のかぎりはこよひなりけり。」伊勢集「春の夜の夢にあへりと見えつれば思ひ絶にし人ぞまたるゝ」兼盛集「思ひつゝねつれば見えつ春の夜のまさしき夢よむなしからすな」六帖第五「春の夜の夢はわれこそたのみしか人のうへにて見るがわびしさ」西行法師山家集「としくれぬ春くべしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢」。これらにてしるべしといはれたりげに拾遺「いにしへをいかでかとのみ思ふ身にこよひの夢を春になさばや」夫木二十四に高遠。「春のよの夢さき川をこぎわたり戀しき人にあふがまさしさ」など。なほあるべし。又。書紀崇神の御卷四十八年に。豐城命と活目尊と。御兄弟の中。いづかたにか御位を傳へさせ給はんとて。御兄弟のみこの御夢を以て。うらかたとせさせ給へる事の見えたるも。春正月とあれば。春夜の夢によしある事かもしは此古事などより。春夜の夢をまさ夢なりといふ事は。はじまりたるにもあらんか。そはしりがたけれど。似たる事なれば今試にいふなり。かゝれば。此「寐られぬをしひてわがぬる」云々の歌も。戀歌にて。物思ひにいも寐られざるをしひてねたる春夜の夢に。逢ふと見つればそをやがてうつゝになすよしもがなといふ意ならんか。又は。時世たとろへたる人などの。春夜の夢の中にうれしき世にあへりと見つるを。其まゝうつゝになさまほしきよしにてもあらんか。題しらずとあれば深く考ふべきよしはなけれど。試に驚かしたくなり

忍びたりける男のもとに。春。行幸あるべしと聞て。さうぞく（裝束）一くだりてうじてつかはすとて。さくらいろのしたがさねにそへて侍ける。

○つかね緒云。春行幸あるべしと聞て。男の許へ裝束をたくるなり。行幸はいづこへともなし。然るに。此詞書のさま。男の家へ行幸有べしといへるやうにて。まぎらはし。されど。古の雅文には。かくさまにいへる事。常のことなり。男の許に裝束をたくるは。供奉の料になりとあり。ひとくだりは。一具なり。てうじては。調（ヅ）じてなり。今の俗に。仕立（シタテ）てといふにあたれり。衣服をとゝのふる事を。調じてといへる事。此集の

ころの常の詞にて。物語書などにも多く見えたり。櫻色は。表白(オモテシロ)。裏蘇芳(ウラスハウ)のよし花鳥餘情に見ゆ。下襲(シタガサネ)は。袍の下にかさぬる衣なり。

我宿のさくらのいろはうすくともはなのさかりはきてもをらなむ

○花の色は薄くとも。盛のころは。我方に來ても居給へかしといふに。枝を折(ヲル)の詞をかけて。あやとしたるなり。さて裏の意は。かくまゐする裝束の。色あひなどはうるはしからずとも。はな〴〵しき行幸の供奉には。着て給はれかしといふなり。

忘れ侍にける人の家に。花をこふとて。

○此作者の。もとは通ひすまれたるが。今は絶たる女の家に。花をこひに消息するとてなり。

兼覽王

年をへて花のたよりにことゝはぐいとゞあだなる名をやたちなん

○古今「あだなりと名にこそたてれ」などもいひて。花はあだなる物にいひならはしたり。その花の序(ツイデ)に。いまかく消息せば。契を絶て居て。あだなりといはるゝうへに。いよ〳〵以て。我あだなる名やたゝんとなり。花のたよりは。俗言に。花のついでといふ意なり。六帖「あぢきなく花のたよりにとはるれば我さへあだになりぬべらなり」重之集「をさなくぞ春のみとふと思ひける花のたよりに見ゆるなりけり」など。猶多くあり。いとゞは。俗言に。彌以(イヨ〳〵モチ)てといふに近し。

よぶこ鳥を聞て。となりの家にたくり侍ける。

○よぶこ鳥は。深山にも里にも。夜にも晝にも。秋冬などにもよみたる歌。萬葉よりはじめて。かた〴〵に見えたり。縣居大人は。古今打聽に。今の俗にかんこ鳥。或はかつぽうといふものならんといはれ。契冲法師は。餘材抄に。いと多く古歌をあげて。終(ハテ)に。今按に。曾丹が集に。「我身をばみな人すべてすさめぬをあはれにもはたよぶこ鳥かな」。源仲正の歌に。「足引の山鳩のみぞすさめける散にし花のしべになる身を」。世に年よりこよと鳴くとて。やがてしか名付たり。鳩はげにも然聞ゆれば。昔よりかくはよめり。西行上人の歌に。「山ばたのそばのたつ木にゐるはとの友よぶ聲のすごき夕暮」。和名抄。鳩。夜万(ヤマ)八止(バト)鴿以倍(イヘ)八止(バト)此外に。喚子鳥をば出されたれど。野王按。此鳥種類甚多。鳩(ハ)其總名也といふをも引たれば。仲正が歌を以て。曾丹が歌に引合せて證するに。彼年よりこよといふはとにや。但かくいへばとて。是

なんそれと定めて申にはあらで。見及べることを注したくばかりなりといはれたり。さて。難波人。入江昌喜といふが。くぼのすさびといふ書に。種々の論をあげて云。もゝちどり稲負鳥は。顕注密勘僻按抄等にも。くはしくしるされたれども。呼子鳥には。何の沙汰もなし。定家卿。二鳥を釋して。豈一鳥を漏し給はんや。顕昭法橋亦しらざらんや。此よぶこ鳥。其頃までは。たれ〳〵もよく知たる鳥なれば。注に及ばざるなるべし。されば。人毎によめる歌も多く見えたり云々とて。右の契沖の説。又三首の歌をも出して云。近きころ。躬恒集の古本を見侍しに。「聲きけば老のまさるに人にくゝ來つゝのみなくよぶこ鳥かな」と侍り。またく。かの年よりこと鳴聲をさしてよめると聞ゆ云々と見えたりげに上の歌四首を相照して見れば。かのとしよりこと鳴をいへるやうには聞ゆるなりかたき事をまづあきらめまほしく思ふも。學者のなべての心なれども。しからば。やすき事どもをば。皆よく明らめしれるかとこゝろむれば。いとたやすき事どもをだに。いまだえとよくもわきまへず。さるものゝ。さしこえて。まづかたきふしをあきらめんとするは。いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて。心もとゞめぬ事に。思ひの外なるひがこゝろえの多かる物なれば。まづたやすきことをいく度もかへさひかむがへ。とひもらめて。よく得たらん後にこそ。かたきふしをば思ひかくべきわざなれと。鈴屋大人もいはれたり。されど。かたきふしなりとて。むげに思ひもかけずさしおかんも。またくちをしきわざなるべけれど。またかたきふしのみ。一つふたつなど明らめたらんも。何ばかりかはたけきわざにはあらん。こは初學のよく心得べきことなれば。今ことのついでにいふのみなり。

春道つらき

我が宿のはなにな鳴そよぶこどりよぶかひありてきみもこなくに

○こなくには。來ぬになり。汝がよぶとて。隣家の人も來ざれば。さらによぶかひもなしと。されば我宿の花になく事なかれと。鳥に令するよしにて。さて隣の人の我にうときを恨てたくりたる意なり。

壬生忠岑

けるついでに。身をうらみて侍ける返事に。

○抄云。左近のつがひのをさとは。左近衛の番長といふ事なり。古今。忠岑か長歌にてるひかり近きまもりの身なりしをとよみし是なり。身をうらみては。近衛の番長は。大將以下の判授の官にて。卑賤なる身の述懐をいふなるべしといへり。左右近衛府。また。舍人。番長等の事。委くいはまほしけれど。事長ければ。別記にいふを合せて見るべし。

きの貫之

ふりぬとていたくなわびそ春雨のたゞにやむべきものならなくに

○いたづらに其まゝにては。決てやみ給ふべきにはあらず。今昇進あるべければ。古きものにして。見すてられたるやうなる身なりとて。甚しくわび給ふことなかれとなり。春雨のはぷりぬやむべきなどいはん料なり。

後撰和歌集巻第二新抄 終

後撰和歌集巻第三新抄

中山美石著

春歌下

贈太政大臣相わかれて後。ある所にて。其ころを聞て遣しける。

藤原顯忠朝臣母

○作者顯忠朝臣母は。源湛女なり。贈太政大臣は。本院の時平公にて。顯忠朝臣の父なり。

鶯のなくなる聲ははむかしにてわが身ひとつのあらずもあるかな

○時平公の聲を鶯になぞらへて。其ころは。昔すみ給ひたるをりにかはらねど。今は

絶果給ひぬれば。わが身ばかりは。もとのやうにもなき事かなとなり。榮花物語。日蔭蔓巻。宣耀殿女御「かすむめる空のけしきはそれながら我身ひとつのあらずもあるかな」新古今雑上「昔見し春はむかしの春ながら我身ひとつのあらずもあるかな」なども。皆我身のみかはり果たるよしなり。又。古今五「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」といふは。此。あらずもあるかなもとのやうにもあらぬ事かなといふをふくめたるなれば。よめる意はみなたなじ。

櫻の花の。かめにさせりけるが散けるを見て。中務に遣

しける。

○古へは。花を瓶にさすに。近世の俗に。生花など云さまにさしたるにはあらず。大なるも小きも。いさゝか枝づくろひなどはせらんまづは。折たる枝のまゝにさせるなり。古今上春に。染殿の后のおまへに。花がめに櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる。とある詞書。また。枕草子に「おもしろく咲たる櫻を。長くをりて。大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ」。また「高欄のもとに。青き瓶の大なるするて。櫻のいみじう面白き枝の。五尺ばかりなるを。いと多くさしたれば」云々などあるにて。其さまをもふべし。

ひさしかれあだにちるなと櫻ばなかめにさせれごうつろひにけり

貫之

○瓶を甕にそへて。久しくあれとて。甕といふ名の瓶にさしたれど。其かひもなく散たるよとなり。うつろふといふも。即ち散る事にて。詞をかへたるなり。此七首下に。「風をだに待てぞ花のちりなまし心づからにうつろふがうさ」とあるも同じ。

返し

千代ふべきかめにさせれごさくら花こまらむ事は常にやはあらぬ

中務

○千年を經べき名の瓶にさし給へばとて。花は長くはとまらず。散果るが。花のさだまりにては侍らずやといひて。されば。こそ其花も散侍つらめといふをふくめたるなり。此歌。貫之家集には。「千代ふべきかめなる花はさしながらとまらぬことは常にやはあらぬ」と有り。此所の下の句。とまらむとあるは。ことわり聞えず。こはきはめてとまらぬの寫誤なり。契沖法師も。師翁もしかいはれたり

題しらず　よみ人しらず

散ぬべき花のかぎりはたしなべていづれともなくをしきはるかな

○花といふ花のかぎり。こと〴〵くちりぬべき花なれば。春咲く花は。いづれともなく。皆悉くをしき事かなといふ意なりと。師翁いはれたり。

朝光朝臣（朝忠朝臣の家の、一本）。となりに侍けるに。さくらのいたう散ければ。

いひつかはしける　伊勢

垣ごしに散くるはなを見（見ればかひなしさくら花）るよりはねごめにかぜのふきもこさなむ（は、六帖）

○見るよりはは。かく見て居んよりはといはんが如し。今見て居ていふ詞なれば。見んよりはといはずして。見るよりはといへるなり。根ごめは。上（春中）に。「香ごめにさそふ風のこぬ間に」とあるに同じく。根共（子トモ）にといふことなり。此歌。家集には。「土御門の中納言の家の。隣にすむころ。其家の花のちるを見ていひやる。垣ごしに見れどもあかぬ梅のはなねながら風のふきもこさなん。かへし。梅の花うゑて我のみ見んとかはとなりあるきも人やするとて」とあり。さて此歌。根ごめに風の云々といへるに。あるじ（朝光朝臣）共にといふ意をふくめたるならんか。早蕨巻（宇治の中ノ君の。京二條院にうつろひ給はん事を。薫ノ君のあつかひ給ふをりの歌）に。「袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねごめうつろふ宿やことなる」とある（袖ふれし梅と）は。中ノ君の事をさしてのたまへるなどに。よく似たればなり。なほ。根ごめといふ詞は。中務集（詞書）に。「みじかきき（桔梗）ゝやうを。ねごめ引て。女三宮より」云々なども見えたり。

女につかはしける　よみ人しらず

はるの日のながきたもひは忘れじを人のこゝろにあきやたつらん

○戀歌なり。春の日の如く。ゆたかに長き心ざしなる我は。いつまでも忘るゝ事はあらじを。そなたの心には。もはや秋がたちて。我を厭（アキ）たるにてやあらんとなり。

だいしらず

よそにても花見るごとに音をぞなく我身にうときはるのつらさに

○季吟法印の抄に。人にふるされたる人の歌なるべしとある。然るべし。一首の意は。春はあだなる花のさく時なれば。花を見るごとに。あだなる人の事を思ひ出して。音になかるゝといふなるべし。我身に疎くする人はあだなる人なり。それを春のあだなるにかこつけて。春のつらきといひなしたるなるべし。又思ふに。此卷の末に。

「やよひにうるふ月ある年。つかさめしのころ。申文にそへて。左大臣の家につかはしける。貫之」とあるが如く。春の司召にもれて。毎春なげく心にて。我身にうとき春といへるにてもあらんか。その心の歌。集中に多し。

風をだにまちてぞ花のちりなましこゝろずからにうつろふがうさ

つらゆき

○花の散るならば。せめて風を待てなりともちるべき事ぞ。風をも待たずして。花の心からちる事のうさよとなり。古今春下に。春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見ん」とあるとは。表裏（ウラウヘ）なるいひ方なり。上句のてにをはゝ。玉緒巻六に。此歌。また古今一「見る人もなき山里の櫻花ほかの散なん後ぞさかまし」などいふを出されて云。此まいは。皆上にぞもじをおけり。つれのまいながら。いさゝか意かはりて。一つの格なり。「かやうにこそあるべき事なれと云意にて、さやうにあらせまほしく願ふこゝろあるなり。古今の歌にていはゞ。外のちりなん後にさかせまほしく思ふ意なり。いづれも皆。これになずらへて心得べしとあり。猶また。遠鏡をもひらき見て。たしかにこゝろうべし。

あれたる所にすみ侍ける女。つれ〴〵にたもほえ侍ければ。庭にある菫の花をつみて。△人の許に、つかれ緒

わがやどにすみれの花のたほかれば。ばきやごる人やあるこまつかな

よみ人しらず

○萬葉八「春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寐にける」などいふ事もあれば。かく我宿に菫（スミレ）の花の多くあれば。もし來宿る人もやあるとまつ事かなどとなり。すみれに。男の通ひすむ意をもふくめたるなるべし。きやどるは。來宿るなり。下雜三に「白雲の來やどる岑の小松原枝しげゝれや日の光見ぬ」ともあり。

題不知

山高みかすみをわけてちるはなをゆきこやよそのひとは見るらん

○一首の意は。明らかなり。山高みは。山が高さになり。よそとは。遠く離れたる方をいへり。戀歌などにて。よそになるよそに見るなどいふも。みな遠くかけ離れたる意なり。

ふく風のさそふものこはしりながらちりぬるはなのしひて戀しき

△人の許に、つかれ緒に。或はともの男のなどいくにふ事なども。事はたてゝらずしてけなし。此例どし。集中の詞の書にいと多し。皆ふ詞を加。べしとつかれ緒見えたりに。

○花をば。風のさそふべき物ぞとはしりつゝ。なほ散たる花が。あながちに戀しき事よとなり。しひては強(シヒテ)なり。俗言に無理(ムリ)にといふも近し。

清原ふかや夫

うちはへて春はさばかりのどけきを花のこゝろやなにいそぐらむ

○うちはへは。打延(ウチハヘ)にて。春は物毎(モノゴト)のび〳〵と。ゆるやかにのどけきものを。花の心にはいかでいそがはしげに散るらんとなり。古今春下「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん」

つねにせうそこつかはしける女ともだちの許より。櫻の花のいこたもしろかりけるえだををりて。これそこの花に見くらべよとありければ。

我やどのなげきははるるもしらなくに何にかはなをくらべてもみむ

父のみこの心ざせるやうにもあらで。つねにもの思ひける

こわかぎみ惟高の親王の女なり。

人にてなんありける。

○我宿は常になげきのみしげく。その歎(ナゲキ)といふ木はもとより花のさくやうなる事はなく。春ぞともしらぬに。此櫻の花をば。何にかくらべても見侍らん。くらぶべき物はなしとなり。春もしらぬといふに鬱(ウツ)々としてくらす意をふくめたり。父惟高のみこの。よきやうにとたもほしたきて給ひし如くもあらざればなり。故に左註をば加たるなり。伊勢集に。となりなる人のそこに見くらべよとて。花たこせたるに。春にだに忘られにける宿なれば色くらぶべき花だにもなし」とあるをも。引合せて見るべし。

よみ人不知

春の。池のほとりにて。

○春のとある。の文字は。誤て後に入たるなるべし。こは「春。池のほとりにて」とあるべきなり。かゝるふりの詞書は。春。よみきりて。池の云々とつゞく例なればなり。

はるの日のかげそふいけの鏡にはやなぎのまゆぞまづは見えける

○池水を鏡になぞらへて。さて人の鏡に向ひて。面をうつせるが如くいひなしたる

なり。春の日のかげそふといふに。池の鏡のいよ〳〵澄(スミ)まさる意もあらんか。柳の眉は。萬葉十九長歌に。「青柳の。細き眉ねをゑみまがり」云々。又。長恨歌に「芙蓉(ハク)如(ノ)面柳(ハシ)如(シ)眉」など猶多かり。

春の暮に。かれこれ。花をしみける所にて。

かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく

○花の常磐なるもありけるよと見るやうに。かく盛のまゝにて。世のあらんかぎりあればよろしきを。何とてかく盛ながら世をば盡さぬことぞ。かくながら世を盡せよかしといふ意なり。此歌。三ノ句の。てぬのては。てき。てし。てゝ。てんなどのてと同じく。つの轉用にて。此歌の上ノ句は。古今。「櫻花春くはゝれる年だにも人の心にあかれやはせぬ」といへる歌の下の句と同じ格のてにをはなりと。玉緒に見えたり。猶委くは。玉緒四の卷(十二葉)。五の卷(廿二葉)。六の卷(五葉)などをひらき見て心得べし。

延喜御時。殿上のをのこどもの中にめしあげられて。たの〳〵かざしさしける次(ツイデ)に。

凡河内躬恒

○殿上は。テンジヽヤウとよむなり。殿上のをのことは。殿上人の事なり。殿上。又。殿上人の事は。下雜一の卷に。委くいふを。引合せて心得べし。躬恒主は前甲斐目(サウクワン)と。古今の序にも見えて。賤官なるを。ことさらに殿上人の中に召上られし事の如く聞ゆるは。歌にいみじくすぐれたる名ある人なれば。さるやうのゆゑにてもあるべし。かざしさすとは。花などを折て。頭にさすことなり。しかさゝん料に折たる花。又。作りたる物などを。かざしといふは。體言なり。髮(カミ)さしの略かりたる言なるべし。又。今さす事を。かざして。かざせ。かざすなど云ふは。用言なり。

かざせども老もかくれぬこの春ぞはなのたもてはふせつべらなる

○花などを頭にさせば。衰老の形も隱るゝさまに古今「鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかざゝん老かくるやど」なともいへど。今は。我が衰老の見にくき姿も隱れざれば。かくかざすも。かへりて花の面目を失ふべしとなり。たもてぶせは。俗に面目(メンボク)失ひといふに當れり。枕草子「さかしらに柳の眉のひろごりて春のたもてをふする宿かな」續千載雜體「はゝき木はたもてふせやと思へばや近づくまゝにかくれゆくらん」など。猶あり。またたもてをたこすといふ詞あり。そは俗に面目をほどこすといふにあたりて。今のおもてぶせといふ詞の反對(ウラ)なり。仲文集。堀川の中宮うせさせ給へる頃の贈答に。「あが佛かほくらべせよ極樂のおもておこしはわれのみぞせん」又蜻蛉日記などにも有り。

題しらず

よみ人しらず

ひとゝせにかさなる春のあらばこそふたゝび花を見んとたのまめ

○重なる春のなきゆゑに。二度花を見ん事の頼まれねば。いとゞ春の暮行ことのをしきとなり。後拾遺春上。「一とせにふたゝびもこぬはるなればいとなくけふは花をこそ見れ」。

花のもとにて。かれこれ。ほどもなくちることなど（をイ）。申けるついでに。

○ちることなどは。散る事かなゝなどゝいひけるといふ意なり。すべて。歌にても詞書なとにても。云々の事と。又は。云々の事などといへる。事と云詞の下には。大かたかくざまにふくみたる意ある語勢なり。其所々にて。よく味ひ見るべきなり。

つらゆき

春くればさくてふことをぬれ衣にきするばかりの花にぞありける

○ぬれぎぬとは。無名（ナキナ）のたつ事なり。僞を。ぬれ衣といふ事。爲家卿の抄に。二說見えたれども。いかゞあらんと思はるゝうへに。契冲法師、縣居、大人なども。いかで無名のたつことを。ぬれ衣とはいふにか。來歷たしかならずなどいはれたれば。其いひ出たるよしは。今しり難き事なるべし。此詞をよみたる歌は。古今集にも此集にもをり〳〵見えたれば。（ことに例など引くまでもなく。）古今集の比よりの事とは見ゆるなり。かくて一首の意は。春のくれば。花のさくといふ事は僞にて。さらになき事をいひて。人を欺（アザムキ）しかと思ふほどに。早（ト）く散たる事よといひてあまりに早く散たれば。咲しとも覺えぬといふ意ならんか。又は。さけども。さかぬといふ虛名（ナキナ）をたてらるゝほどの。はかなきものなりといふ意ならんか。

春。花見に出たりけるを見つけて。ふみをつかはしたりける。その返事（カヘリゴト）もなかりければ。あくるあしたきのふの返事（返しイ）と。こひにまうできたりければ。いひつかはしたりける。

○此詞書。主客の詞たがひて。いとまぎらはしければ。右の如くあらたむべしと。つかね緒に見えたり。

つかね緒云。春。花見に出たりけるを見つけて。ある男の。文おこせたりけるを。かへりごともせざりければ。あくる朝。昨日のかへり事とこひにおこせたりければ。いひつかはしたりける。

春がすみたちながら見し花ゆゑにふみこめてけるあとのくやしさ

○花をばたゞ立ながら見たるに。ふみこめたる跡ありと見つけられて悔しといふを。表にて。花を見るに心ひかれて。思はずも文をとゞめおきて。今さらくやしといへるなり。春霞は。立といはん料なり。此歌。六帖また伊勢家集に。春霞たちながら見し花なれどふみとめてける跡ぞうれしき」とありて。家集にては。詞書もいたくかはれり。さていづれにしても。跡とは。ふみの事にかけていへるなり。文字を鳥の跡ともいへばなり。

よみ人しらず

をここのもこより。たのめたこせて侍ければ。

○たのめは。令頼（タノマ）にて。我にたのましむるなり。

春日さすふぢのうらはのうらごけて君しにもはぐわれもたのまむ

○藤の末葉（ウラハ）のまでは。うらどけてといはん序なり。うらどけては。心解（ウラトケ）てにて。うら悲しいなど（コヽロ）心うちとけてといはんが如し。君だに心底（ウラ）とけて我を思ひ給はゞ。我もまた。君がたのましめ給ふ如くに。たのみ侍らんとなり。契冲法師云。萬葉十四。「春べさく藤のうらはのうらやすにさぬる夜ぞなきころをし思へば」今の歌の。春日さす。少し心得がたし。萬葉の歌になずらへば。春日さく（久）にてやあらんといはれたることなるべし。

題しらず

伊勢

うぐひすに身をあひかへばちるまでもわが物（なりと。家集）にして花は見てまし

○我身と鶯と。たがひに身をかへて。我が鶯になりたらば。散るまでも。花をば我がものなりとして見んものをとなり。重之集。「もみぢ葉をおのが物とも見てしがな見るにいさむる人はなけれど。

元良のみこ。兼茂朝臣のむすめにすみ侍けるを。法皇のめして。かの院にさぶらひければ。えあふこことも侍らざりければ。あくるこしの春。櫻の枝にさして。かのざうしにさしたかせける。

もこよしのみこ

○はじめの。元良のみこと云ふ事ひがことなり。除くべしと。つかねをに見えたり。法皇は。寛平，法皇にて。宇多，上皇の御ことなり。かの兼茂，朝臣の女をめして朱雀，院か。又は亭子，院など。法皇の御所にさぶら(令)はせ(侍)給ふ故に。元良，親王はえ逢ひ給はざるなり。ざうしは。曹司にて。女の局をいふなり。

花の色はむかしながらに見し人のこゝろのみこそうつろひにけれ

○櫻花の色は。かくもとのまゝにてかはらぬに。我が逢見し人の心はかはりはてたる事よとなり。見し人とは。卽ち兼茂，朝臣の女をさしてのたまへるなり。さて此御歌にて見れば。此櫻は。則ち女の家の樹などにやあらん。女と共に去年は見給ひし花の如くも聞ゆればなり。

月のたもし(あかき夜)ろかりける夜△花(△櫻の、異)を見て。

源さねあきら

あたら夜のつきとはなとをたなじくは心し(あはれイ)れらんひとに見せばや

○物のあはれをもしらぬ我身のみ見んは。あたら(惜)しくをしき夜の月花を。とてもの

ことに。物の心をもあはれをもしりてあらん人に見せまほしとなり。あはれしれらんとは。もとよりあはれをしりてあらんといふ事なり。心しれらんといふも同じ意にて。其物其事のうへを。あはれともをかしとも。其時其事につきて。しか思ふべき心をしりてあらんといふ意なり。家集。「色もかもまつ我宿の梅をこそ心しれらん人は見にこめ」。物のあはれを知るといふは。まづすべて。あはれといふは。もと見るものきく物ふるゝ事に。心の感じて。出る歎息(ナゲキ)の聲にて。今の俗言にも。あゝといひはれといふ是なり。たとへば。月花を見て感じてあゝ見ごとな花ぢや。はれよい月かななどいふ。あはれといふは。此あゝとはれとの重なりたる物にて。漢文に。嗚呼などあるもじを。あとよむも是なり。古言に。あな。又。あやなどいへるあも同じ。又。はれとも。はもともいへるはも。かのはれのはと同じ。又後の言に。あつはれといふも。ああはれと感ずる詞にて同じことなり。さて後の世には。あはれのは文字を音便にてわといへども。古へはすべてかやうのところをも。皆本の音のまゝに。はもじは葉、齒などの如くとなへしなり。殊にこのあはれといふ言は。歎く聲にて。あゝとはれとの重なりたるなれば。さらなり。さて又。あはれと見る。あはれときく。あはれと思ふなどいふたぐひは。いさゝか轉じたるいひざまにて。これはあゝはれと感じて見聞思ふなり。又。あはれなりといふたぐひは。あゝはれと感ぜらるゝよしなり。又。あはれをしる。あはれを見す。あはれにたへずなどいふ類は。すべて何事にまれ。あゝはれと感ぜらるゝさまを名づけて。あはれといふ物にしていへるにて。かならずあゝはれと感ずべき事にあたりては。その感ずべきこゝろばへをわきまへしりて感ずるを。あはれをしるとは云なり。又。物をあはれぶとをあはれびとあるなどをもてしるべし。又。後の世には。あはれといふに哀の字を書て。ただ

悲哀の意とのみ思ふめれど。あはれは悲哀にはかぎらず。うれしきにも。おもしろきにも。たのしきにも。なかしきにも。すべてあゝはれと思はるゝは。皆あはれなり。さればあはれにをかしくとも。あはれと感じたるを。あはれにうれしくとも。つらはれと感じたるを。あはれにとはいへるなり。但し又。をかしきにもうれしきにもあゝ對へていへることも多かるは。人の情のさま〳〵に感ずる中に。うれしき事。おもしろきことなどには。感ずる事深からず。たゞ悲しき事。うき事。戀しきことなど。すべて心に思ふにかなはぬすぢには。感ずる事こよなく深きわざなるがゆゑに。しか深き方をとりわきても。あはれといへるなり。俗に悲哀なのみいふも。その心ばへなり。たとへば。若菜巻に。梅の花を。花のさかりにならべて見ばやといへることあるが知し。梅の花も花なれども。それにむかへても。櫻をとり分て花といへり。さて又。物に感ずとは俗にはたゞよき事にのみいふめれど。も。是も然らず。字書に。感は動也といひて。心のうごく事なれば。よき事にまれあしきことにまれ。心の動きて。あゝはれと思はるゝは皆あはれといふ詞によくあたれる文字なり。漢文に。感二鬼神一と有て。古今集の眞名序にも然書れたるを。かな序にはおに神をもあはれと思はせとかゝれたるにても。あはれは物に感ずる事なるをしるべし。大かたあはれといふ言の本。又うつりて遣ひたるやうなど。上件にて心得べし。かくて又。物のあはれといふも同じ事にて。物といふ言は。言を物いふ。かたるを物語。又。ものまうで。物見。物いみなどいふたぐひの物にて。ひろくいふときに添ることばなりさて。人は何事にまれ。感ずべき事にあたりて。感ずべき意をしりて感ずるを。ものゝあはれをしるとはいふを。かならず感ずべき事にふれても。心うごかず。感ずることなきを。物のあはれしらずといひ。心なき人とはいふなり。ものゝわきまへ心ある人は。感ずべき事には。おのづから感ぜではえあらぬわざなるに。さもあらぬは。何とも思ひわくかたなくて。かならず感ずべきこゝろをしらねばぞかしなど。鈴屋大人の。玉の小櫛にいはれたるが如く。人のいふ言にもあれ。するわざにもあれ。木草のうへ。

鳥蟲の聲。空のけしき。野山のありさまなど。すべて感ずべき事にあたりては。其感ずべきこゝろばへをわきまへしりて。あゝはれと感ずるを。物のあはれをしるとはいふなり。委くは。玉の小櫛を見てわきまふべし。

あがたのゐごゝいふ家より。藤原治方につかはしける。

○縣井戸は。地名なり。拾芥抄に。井戸殿 又縣ノ井戸。一條ノ北。東ノ洞院ノ西角。と見え。枕草子 家はと いふ段に。あがたの井戸。東三條。小六條などゝも見えたり。縣といふことのもとは。古事記傳。廿九ノ巻の五十九より。六十三葉までにつまびらかなり。井の事も。同書。七ノ巻五十葉に委く見えたり。また正明の。辛酉隨筆にもつまびらかに記されたり。されど。此所のは地名になりての事なれば。あがたの事も。井の事も。さしも用なければ。彼書どもを引出て委くは記さず

橘公平女

みやこ人きてもをらなんかはづなくあがたのゐごのやまぶきの花

○都人とは。治方ノ朝臣をさしていへるは論なし。しか都人としもいへるは。我が居る所を。縣の井戸といふ。そのあがたは。古今集 雜下 小町 の詞書に。文屋康秀が。三河のぞうになりて。あがた見にはえ出たゝじやと。いひやれりける返事に。といひ。伊勢物語 四十四段

に。昔あがたへ行人に。馬のはなむけせんとて」とあるなどは。縣のもとの意（牟ナカ）より。うつりて田舎といふが如くなれば。此所のも。今我が在る所の名の。あがたといふ田舎といふ意につきて。さきの人を。都人とはいへるなるべし。二句は。來ても居らなんといふを。折れかしといふにかけたるなり。上。春中卷に。「我宿の櫻の色はうすけれど花のさかりは來てもをらなん」とあるに同じ。三句は。萬葉八に「かはづなく神なび川にかげ見えて今やさくらん山吹の花」古今春下「かはづなくゐでの山吹散にけり花のさかりにあはましものを」などの如く。其所の物を冠らせて。歌のにほひとせるなるべし。今蛙の鳴て居る所の山吹（今俗に。かはづともかへるともいふ物とも。また。河鹿（カジカ）ともいふにはあらじ。

ふものとも。別なるよしなどは。別記に委く云ふを見てわきまふべし。

すけのぶが母身まかりて後も。ときゝ〳〵かの家に。敦忠朝臣のまかりかよひけるに。櫻の花のちりけるをりにまかりて。木のもとに侍ければ。家の人のいひ出しける。

○助信は。敦忠卿の子なり。

よみ人しらず

つかれ緒

つ。敦忠。朝臣。助信が。母の。家に。まかりて。後も。時通ひ。もまかりける。ひまに。櫻の花の。散にけるを。木のもとに。侍りけれ。ば。家の人の。いひ。だ。しける。

今よりはかぜにまかせんさくらばなちるこのもとに君とまりけり

○今よりは。花のちるをもさしもいとはじ。木の下に君はとまり給ふを見ればと云て。兒（コ）の許にかけたるのみなるべし。師云。今よりはと云詞も。たとへの方へはかけずに。今日の實の上にのみいへるなり。風にまかせんといふも。花にたゝかはせて云にはあらず。只はかなく何となくいひなしたる歌なり。風はたのみにならぬはかなき物なるを。其風に云々と云ふなり。今こゝに。風にちる櫻の本に立とまり給へるにつきて。兒（コ）許といふ事をいはん料にかくいへるなりといはれたり。かくざまによみたる歌は。一つのにはあらず。今の世の歌よみ。初學びの心には。とりしまりなく。たゞしかならぬやうに思ふべけれど。これ又いにしへのみやびたるよみざまの一つにて。すべて古への歌には。全くたとへの方を表にて實の意を裏によみ。其たとへの方の一言一言に。こまやかにあたるもあり。此歌などの如く。こまかには當らぬやうに。大らかによみたるもすくなからず。又たとへの上の詞と。實の方の詞と。入交りたるもあり。萬葉には。ことに此たとへと實との詞。入交りたる歌多きなり。なほ委くいはゞ。はんにはべらじ。種々のすがたあれども。さまでくだ〳〵しくはいはず。なぞらへてさとるべきなり。

あつたゞの朝臣

風にしも何かまかせんさくらばなにほひあかぬにちるはうかりき

○風にまかせんといふを。助信。朝臣の母の事にとりなして。とがめて。いかで風には

まかせん。あかでちりしはうかりしものをといひて。かの母の身まかりしはうかりつるをといふ意なり。

櫻川といふ所ありと聞て。

○櫻川は。常陸國と。八雲御抄。井蛙抄等に見えたり。筑波山より流出て。みなの川の末にて。櫻の多き所なりと。玄旨法印の百人一首抄等にはあれども。國人は。水上を櫻川といひ。末をみなの川と云ふといへるよし。或書には見えたり。

常よりもはるべになればさくら川なみのはなこそ間なくよすらめ

○一首の意明らかなり。波の花は。古今春上。「谷風にとくる氷のひまごとにうち出る波や春の初花」また物名。「波の花たきからさきてちりくめり水の春とは風やなすらん」などなほ多かり。

つらゆき

前栽に山吹ある所にて

わがきたるひとへごろもは山吹のやへのいろにもたこらざりけり

兼輔朝臣

○一首の意は。かくれたる所なけれど。戀の意などをしたにふくめられたるやうにも聞ゆ。もしは相しりたる女の。調じてたくりたる衣などを着て。其女の家に行給へるをりなど。よまれたるにはあらじか。われは二心なく。ひとへ心にてとひ來つれば。山吹のやへ重なれるにもたとらずといふ意のやうなり。契冲法師は。無位の時の歌なるべしといはれたれど。いかゞあらん。ひとへ衣とは。俗についたけ襦袢（ジュバン）といふほどの物なりと正明いへり。山吹といふ色は。表黄。裏青なり。もて青。裏黄なるをば。うら山吹といふよし。花鳥餘情などにも見えたり。

題しらず

在原元方

一とせにふたゝびさかぬはななればうべちることを人はいひけり

○一年の間に。二度とはさかず。春のみたゞ一度さく花なれば。散る事をしみて。人のとかくいふは。理（コトワリ）なる事よとなり。人はいひけりは。俗言に。彼是いふなどいはんが如く。其事をとがめいふ意なり。上春に。山守はいはゞいはなん云々とあるに同じ。

一とせ。ふたとせ。千とせ。などのとせは年經（トシヘ）の約りたるにて。たゞ一年二年といふとは異なるよし。鈴屋大人いはれたり。故とこゝなども。一年の間にといはんがごとし。一年にと心得てはいさくかたがへるなり。

寛平御時。さくらの花の宴ありけるに。雨のふり侍けれ
ば

○櫻花の宴は。花を賞(メデ)て。詩歌管絃の御遊などある事なり。源氏物語の花宴。榮花物語の。月宴などの類。皆同じ。宴字は。音にてエンとよむ事。此時代のならひなり。

春さめの花のえだよりながれこば(もりて)

藤原敏行朝臣

なほこそぬれめ香もやうつると(香にほふべく、六帖ぬれこそぬれめ何かかくれん、異)

○ながれこばは。流れ來ばなり。なほこそぬれめは。ひたものにぬれんといふ意なり。なほの詞は。此所には。俗にひたものといふにあたれり。一首の意は。六帖などのと合せ見れば。明らかなり。

いづみの國にまかりけるに。うみのつらにて。

○海のつらは。海のほとりをいふなり。眞名伊勢物語に。海頭(ウミノホトリ)と書き。箒木巻に。ふかき山里。世ばなれたる海づらなどに。はひかくれぬかしとあるなどにて心得べし。

春ふかき色にもあるかなすみのえのそこもみごりにみゆるはま松

よみ人不知

○松の色のうつれるゆゑに。住江の底も緑に見ゆるはいと〳〵深き松の色にもあるかなとなり。住吉の松をよめるなり。春深き色とは古今(春上)に。ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけりとあるなどの意にて。春は緑の色もことにそふ物なればなり。詞書には和泉國に云々と有て。歌には住吉とあるは。住江は攝津國ながら。和泉國への道なりと。抄にいへるが如し。住の江は。今すみよしといふ所なる事は。いふもさらなり。此住江を。すみよしともいふは。萬葉の歌に。多く住吉と書たる吉の字は。エの假字に用ひたるなるを。ヨシと讀誤たるよりの事なり。近江ノ國。日枝(ヒエ)神社を。日吉(ヒエ)と云ふも同じ。されどこはやく古くより草おふといふなりとあるなどや。たしかに住よしとよみたるはじめならん。

女ごも。花見んとて。野邊に出て。

○女どもと。花見んとて云々とありしを。文字を一つ寫もらせるなるべし。趣意は女共と云々といふ事なればなり。

ないし(典侍)のすけ(因香)よるかの朝臣

春くれば花見んとおもふこゝろこそ野邊のかすみとゝもに立けれ（出れ、菅萬立まじりけれ、一本）

○抄云。野べの霞とゝもに立ければ。花見んと思ふ心の。霞とゝもに立いそがるゝ心なるべし云々。心のたつといふ事。今の人の心にては。少しいかゞなるやうに思はるれど。心の發起する事なれば。かくもいはるゝなるべし。一本に。野べの霞と立まじりけれとあるは。かへりてよろしくも思はれずと。師翁もいはれたり。

あひしれりける人の。久しうとはざりければ。はなざかりにつかはしける　よみ人しらず

我をこそとふにうからめはるがすみ花につけてもたちよらぬかな

○一首の意は。萬葉十「我こそはにくゝもあらめわが宿の花橘を見にはこじとや」。新古今（春上）「とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人はをりにこそよれ」などの類なり。春霞は。たつといはん料のみ。うからめは。俗言に。イヤニアラ｜ウケレといふ意なり。（うき身といふも賤（イヤシ）き身といはんが如く。姿形の見ぐるしき事にて。さて姿形の見ぐるしきは厭（イト）はしく思ふ物なり。其いとはしく思ふは。即ちイヤに思ふなり。下雜一に「いせの海のつりのうげなるさまなれど深き心はそこにしづめり」。とある歌詞書などをも見合せて心得べし。世をうき世といひ。戀の上にてうき人などいふは。憂（ウ）く思ふ意にて。異なるやうなれども。うき世といふ時は。我がいとはしくイヤに思ふ世。うき人といふは。我を厭はしくイヤに思ふ人の事にて。いひもてゆけば。一つ心におつるなり。又ニクイ。ニクラシイなどいふ意にもつかへり。意はイヤなりといふと同じことなり。）

（つかれ結云。源清蔭朝臣あひしれりけるを。久しうとはざりければ。花ざかりにいひ遣しける。）

返し　源清蔭朝臣

立よらぬはるのかすみをたのまれよ花のあたりと見ればなるらむ

○抄云。花のあたりと見れば。むげに立かくさんやとて。霞も立よらぬならん。さやうの心づかひ。霞を頼まれよとなり。霞も。花は花としる心ありとの心をこめてよめるなるべしといへり。猶思ふに。我が深くも思はぬ心ならば。をり〳〵通ひて。君が名のたつをもいとはざらめど。深く思ふあまりに。君がためを思へば。かへりてしばしははたちよらぬぞといふ意をも。ふくめたるならんか。（末句。「見ればなるらん」とあるは。一首を霞の上にして。表の意は霞にてしたてたるがゆゑなり。下戀四に「ながれよるせゞの白波淺ければとまるいな舟かへるなるべし」とあるなども。同じしたてなり。こは近世人などの歌には。をさ〳〵多からぬを。此集のころなどには。をり〳〵ありて。いとみやびかなるいひざまなり。かかる所なども。よく心をつけて見るべき事と思へば。おどろかしおくなり。）

山櫻ををりて。おくり侍とて

○山の櫻をといふ意なり。歌の二句に尋ねてといへる。即ち山の花なる事を思

（つかれ緒云。山櫻ををりて人の許におくり侍とて。）

はせたるにもあらんか。さて。必ず山の花ならでも。歌に山櫻とよむ事は。梅などは大たべし。さてうつりては。山郭公などは人の家近きが多く。櫻などは山なるが多ければなるていふ詞ともなれるなり。近世の類に。必しも山といふ詞に用はなしとも。輕くそへて。其中の一種を。山櫻といふとは異なり。

君見よとたづねてをれるやまざくらふりにし色こそもはざらなむ　伊勢

○君に見せんとて。わざ〳〵と尋て折たる花なり。されば其こゝろざしを賞て。古くなりたる色なりと。思ひすてゝ給はるなとなり。

みやづかへしける女の。いそのかみといふ所にすみて。京の友だちのもとにつかはしける。

○禁中に仕へ奉たるが。今は石上に引こもり居るなり。

神さびてふりにしさとにすむ人はみやこにほふはなをだに見ず　よみ人しらず

○神さびては。舊くなりてといはんが如し。我は古くなりて。そのうへ古き事にいひならはせる布留の里にすめば。くづをれ果て。都の事とては。此時節にさきにほふ花をだにも見ずとなり。神さびは。萬葉考別記に云。佐備。こは四くさばかりに轉しいふめり。○一つは進む事を須佐備。また佐備ともいへり。古事記に「速須佐之男命」云々。我勝云而。於勝左備。離天照大御神之營田之阿埋其溝」云々。かの命かけ物に勝ましく御心勢ひの進みに。物を荒しなどし給ふを。勝佐備といひて。荒進む方にいへり。○また卷七萬葉也今ノ十卷に「朝露に唉酢左毘たるつき草の」てふは。たゞ花の唉進むなり。卷十八に「翁佐備勢牟」てふは。老の心進みせんといふにて。愁いかる時。心の和進わざするに同じ。心ずさみ。手ずさみなどいふ是なり。卷四今ノ十一に「雲だにも灼したゝば。意進。見乍をらまし。直にあふまでに」てふ。意進の字を思へ。神佐備といふも同じ。此卷卷ノ一云ふに神長柄。神佐備世須登。芳野川」云々てふ。卽天皇の神御心のすさみせさせ給ふよしなり。○二つには。只神ぶりしたる事をも神さびといふ。此卷に「耳爲之青菅山者云々。神佐備立。」卷六今ノ十四に「神さぶる伊駒高嶺」などの類多かり。卷二に「宇眞人佐備而」。卷九今ノ五に「遠等咩良何。遠等咩佐備周等」などいふも。かのすさびより出て。物の有さまをいふことゝも成ぬ。是一轉なり。（ならのみもいへるは。轉にはあらで言の略なり。）○三つには。かの神

ぶりとするよりまた轉じて。たゞ古びたる事とも成ぬ。巻十四今、三に。いつの間も神佐備けるか。香具山の。ほこ杉が末。薜生までに」。巻十二今、八に。「神佐夫等。いなにはあらず。」巻七十今、に。「石上。ふるのかみ杉。神さび備而。吾は更々。戀にあひにけり」とさへあり。〇四つにはうらさびといふ。云々と見えたり。うらさびの事は。此所の用なり。されど。末に委くいふべし。猶下雑一翁さびの所さかいへるをも引合せて見るべし。

法師にならんの心ありける人。やまこにまかりて。ほご

久しく侍てのち。あひしりて侍ける人のもとより。月ご

ろはいかにぞ。花はさきたりやといひて侍ければ。

〇此詞書。ほふしにならんの心ありけるといふ詞は。此作者のみづからの家集に有しまゝなるべし。歌にあづからぬことなれば。此集にてはようなきいたづらごとなりと。つかね緒にいはれたり。

みよし野の吉野（山べにさける）のやまのさくら花しらくもとのみ見えまがひつゝ（あやまたれつゝ、六帖）

〇花の咲たりなどいはんはたゞろか。たゞしら雲と見ゆることなり。古今春上「みよし野の山べにさける櫻花雪かとのみぞあやまたれける」などのたぐひなり。

亭子院の寄合のうた。

〇拾芥抄云。亭子院。寛平法皇御所云々。所は七條西洞院と抄にいへり。宇多天皇の下居（おりゐ）させ給ひて。始は朱雀院に大ましまし。又亭子院を造らせましてそこにはしましたる故に。此帝の御事を。亭子のみかどゝも亭子院とのみも申奉れり。さて此歌合は。延喜十三年の事なりと。古今集打聽に見えたり。

山ざくらさきぬるときはつねよりもみねのしら雲たちまさりけり

〇一首の意かくれたる所なし。古今春上「櫻花さきにけらしもあし引の山のかひより見ゆるしらくも」

山（乃、一本）櫻を見て。

〇山の櫻を見てといふ意なり。のもじは。後にうつしたとせるにてもあるべし。やがて一本には。山のとあり。

白くもと見えつるものをさくら花けふはちるとやいろことになる

○古今春下「春霞たなびく山のさくら花うつろはんとやいろかはりゆく」。今の色ことになるといへる。大かた似たり。

だいしらず

わが宿のかげともたのむふぢの花たちよりくこもなみにをらるな

ぞ、續千載

よみ人しらず

○抄云。かげと頼むは。身をかくしたく所と頼む心なり。なみにはなみなみにはをらるゝなといふ心をそへて。波は立よりくるともをらるゝなとなりといへり。此歌。かげとぞたのむとは。藤原氏をたのむよしなどをふくめたるにもあらんかなども思ひつれど。又よく思ふに。さまでふかき心をこめたるにもあらざるべし。六帖に「わたのみしゝひがもとむなしきとこになりにける哉」などの類なるべし。なほ此歌は。伊勢家集に出て「海づらの家に。藤花さきたり」と詞書あり。かくては屏風などの繪をよまれたるなるべし。さてはいよ〳〵よく心得らるゝなり。我宿の云々とは。此海づらなる家の。主の意になりていへるなり。なみにをらるなとは。花のあたりに波の立來るさまのあやふげに見ゆれば。打見たるまゝをはかなくいへるなるべし。拾遺夏「手もふれでをしむかひなく藤の花底にうつれば波ぞをりける」とあるなどをも思ふべし。抄に。なみ〳〵にはをらるなと云心をそへたるなりといへるはいかゞなり。

はなざかりまだもすぎぬに吉野川かげにうつろふきしのやまぶき

○抄云。盛過てこそうつろふとはいふに。ばや水の影に山吹のうつろふとなりとある然るべし。水に影の映ると。花の散移落と。詞同じきによりてかくはいへるなり。かくさまに。いさゝかなる詞のよせなどを以て。一首のしたてとする事。古への風雅には常に多き事なり。これはたよく心得べきことなりかし。

人の心たのみがたくなりければ。山ぶきのちりさしたるを。これ△見よとて遣しける。

△を、一本

○散さしたるとは。ちりかゝりて殘あるをいへるなり。六帖に「いとまだき過ぬる秋のかたみには枝に紅葉ぞ散さしにける」。ともあり。

しのびかねなきてかはづのをしむをもしらずうつろふ山ぶきの花

と、異

○よそにうつろふ人をしみて。え忍びあへず。我が聲たてゝなくともしらでなほ

たのみなくなりゆく事よとなり。戀歌なり。

やよひばかり。の花のさかりに。道まかりけるに。

○やよひばかりののゝ文字は例の誤なるべし。すべて詞書にかゝるふりにいへる。やよひばかり。ふみ月ばかりなどいへるは。花のさかりに云々。そはやよひ頃の事なりといはんが如く。いつのころといふ事を。かろくいひたくのみなればゝやよひばかり。とよみ切て。花の云々と心得べし。さるゆゑに。の文字を入て。下へつゞくる所とは異なり。をゝやの中には。然るべく聞ゆるもあれど。それはた本末たがひなどして。なさなきいひざまなり。この月の號といふものは。深きゆゑよしある事と見えたり。鈴屋大人も。思ひよりたる事もあれど。いまだよくも思ひさだめざれば。いひがたしといはれたり。縣居大人の説もあれど。猶いかがあらんと思はるれば。こゝには擧げず。おのれもいさゝか考へなどの説は。きはめてひがことなれば。こゝに彌生計とかきたる本も有。また他の月の名も。右のさまにいひならはせる説をば。うくまじきことなれば。一わたりおどろかしおくなり。

僧正遍昭

をりつればたぶさにけがるたてながらみよの佛にはなたてまつる

○花を折れば。手にふれて汚るゝゆゑに。立てある其まゝにて。三世諸佛に奉るなりと云意なり。まことには。紅葉の錦神のまに〳〵などの如く。途中なれば。折取て物せん便あしきゆゑに。立ながらなるを。手ぶさに汚るといひなして。常にをり取たる花は。本尊やうの佛に供する事なるを。今はたてながらといふによりて。三世の佛にと廣くいはれたるなるべし。たてながらは。ふと思へばたちながらとあるべきやうなれども然らず。たてながらは。立ちてあるまゝにてといふ意なればなり。又たてながら見よと云かけたるにはあらず。思ひあやまるべからず。此歌上下の句の間にさるゆゑにといふ事を加へて見ればひとわたりよく心得らるゝなり。かくて或説に。神樂歌に。みづ垣の神の御代よりさゝの葉をたぶさにとりてあそびけらしも。とあるを。此歌の手ぶさの事に引たるは誤なり。神樂歌の手ぶさは。手草をうたひ誤たるなればこゝに引はあたらぬことなり。手草は。古語拾遺。また古事記。磐屋戸の段に竹葉を手草とすと云證あればなりと。師翁いはれたり。

よみ人しらず

みなそこの色さへ深きまつがえに千とせをかねてさけるふぢなみ

○水にうつる緑の色も又深き松枝になり。松に掛れる藤なれば。千とせをかねてとはいへるなり。此歌も。水邊の藤をよめるは論なくして。猶千とせをかねてと云わたりなどは、いさゝかやうありげに聞ゆ。もしは上の「立よりくとも波にをらるな」などゝ同じく。屏風の繪などをよみたるにはあらじかとも思へど。より所なければさだめがたし。藤を。ふぢなみともいふは。花の垂て靡く物なれば。なみは。なびきの約まりたるなりと。縣居ノ大人いはれたり。

やよひの下の十日ばかりに。三條右大臣。兼輔朝臣の家にまかりわたりて侍けるに。藤の花さけるやり水のほとりにて。かれこれにほみきたうべけるついでに。

○此詞書。三條右大臣の五文字は除くべきよし。つかね緒に見えたり。作者のみづからの名なればなり。やり水は。庭などにことに作りて。こなたかなたへ流しやり。或は便よき所にては。川の水をせき入て物しなどもしたる水にて。今世にいはゆる泉水なり。箒木卷なる。紀伊寺の中川の家のさまなどにてよく心得らるゝなり。やとり水と書たる本もあれど。そは誤なり。大みきは。大御酒なり。酒の事を御酒といふは。もとは。大嘗會の白酒黒酒などの。神に奉るをいふより。天皇の御をのみ申す事なるべきを。轉りては。やごとなき人の前などにては。其人を敬ひて。にほみきともいふ事にはなりたるなるべし。たうべといふ詞の事は。上(春上卷)に云り。

三條右大臣

かぎりなき名ににふふぢの花なればそこひもしらぬ色のふかさか

○かぎりなき名ににふ藤のとは。藤を淵によせて。藤は。古へ清て。淵の如く唱へつらんよしは縣居ノ大人もいはれたり。げにさもあるべし。此次下に貫之主の。「さをさせど深さもしらぬふちなれど」とよまれたるは。全く淵にいひなされたるなり。猶他の歌にも此たぐひ多し。又。今も東海道三河國なる藤川驛なも。其所の人も。そのわたりにても。又加茂ノ郡などの人も。皆ちをすみて。淵の如く唱ふるなり。但し然らずとも。清濁かよはして。和泉川いつ見きとてかなどの如くいひかくるも。常の事にはあるなり。淵といふ名に負てある花なれば。其色も。かぎりもなく。底ひもしられぬ深き事かなとなり。さて下句そこひもしらぬ云々は。あるじの御ふるまひ。奥ゆかしき事どもにもあるかなといふ意をかね給ひ。そを底ひも云々といはんとて。上の句はかぎりなき云々とはにき給へるなるべし。名ににふとは。其名に負持つ事にて。俗

言にいはゞ。某(ナニ)ト名ニ付テアル。其名ノ通(トホ)リノといふ意なり。淵底ひなどは。やり水のよせなり。末句のか文字は。かなの意なり。此歌。抄には。兼輔も北家の藤原にて。冬嗣公の曾孫。良門の孫。左中將利基の子なれば。かぎりなき名にたふとよみしなりといへれど。そはいかゞなる說にて。師も。藤家の事にはかゝはるまじき歌なりといはれたり。

兼輔朝臣

色ふかくにほひしことはふぢなみのたちもかへらで君(ず、家集)とまれとか

○立かへりもせで。いつまでもかくたはせとて。藤の花も色深くはにほひしにやあらん。さやうに思はるとなれり。藤なみを波にいひかけて。立もかへらずなど緣の詞なり。此末句のかは。一度うたがひて。又おしはかり定むる意なり。玉緒にいはゆる切るゝかにて。上の歌のかなの意なるとは異なり。

つらゆき

さをさせどふかさもしらぬふちなれば色をば人(も)もし(は、異)らじとぞ思ふ

○主人(アルジ)兼輔朝臣の。たちもかへらで云々にこたへて。かくかりそめに來ても。すべてすべていとねんごろにて。たくゆかしき事どもなれは。實(マコト)に立もかへらで長く居よと思ひ給ふにや。又は勉(ツトメ)てあへしらひ給ふにや。其心中をば。誰もしり侍らじと思はるとなるべし。さて此貫之主は。右大臣ともろ共に訪はれたるか。又は兼輔朝臣の方に居られたるか。そは知ざれども。此次の「あさぼらけ下ゆく水は」云々も。此歌も。ともに賓と主とのあはひの(俗にいふ取持(トリモチ)の)意にてよまれたるやうに聞ゆ。又思ふに。此主は兼輔卿に名つきたくりて物せられたる事。下(雜)にも見えたれば。ことにしたしかるべき事は論もなければ。今も賓(右大臣殿)をもてはやさんためなどに來られて。此主も主(アルジ)兼輔卿と同じく。「かぎりなき」云々にこたへて。げにそこひもしらぬとのたまふはさる事にて。主の心は。たどりもしられぬ深き心なれば。そのねんごろに思はるゝ程(イロ)をば誰にてもしり給はじと思ふといふにてもあるべし。

ことふゑなごしてあそび。ものがたりなごし侍けるほどに。夜ふけにければ。まかりとまりて。またのあしたに

○此詞書以下の三首も。上と同時の事にてつゞけり。まかりとまりてのまかりは。たゞ添(ソ)はりたる詞にて意はなし。今世の俗言に。マカリナラヌなどいふに似たるつかひざまにて。少しいかゞはし。

きのふ見し花のかほこて今朝見れば寐てこそさらに色まさりけれ

三條右大臣

○藤花を。女の容儀（スガタ）などの如くとりなして。一夜寐て馴つれば。又今朝はことさらに色のまさりて見ゆる事よとなり。紫色は。まことに朝はまさりて見ゆるものにもあり。又女などの。相馴ては容儀の見まさりするやうに思はるゝも人情の常なり。猶人の姿の朝まさるよしは。夕顔巻に。源氏君の御事を。日さし出るほどに出給ふあさけの御すがたは。げに人のめで聞えんもことわりなる御さまなり。などもみえたり。花のかほは興風集「うすくこきいろはまがへど花といへばひとつかほにも見えわたるかな」。若紫巻「たく山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見る哉」など猶あり。

一夜のみねてしかへられば（を見せんや、師輔集）ふぢの花こゝろこけたるいろ見せんやは

兼輔朝臣

○寐てこそさらに云々といふをうけて。いな。たゞ一夜ばかり寐て。歸らんとのたまふやうなる心淺さにては。花も心とけたる色をば見せ侍らんと。人の好色の如くによみなして。猶右大臣をとゞめらるゝまもぶきなり。

朝ぼらけしたゆくみづはあさけれご深くぞはなのいろは見えける

つらゆき

○げにあるじののたまふ如く。一夜ばかり宿りてかへり給ふは。深き御心にはあらねど。主人のもてなしは。淺からぬ御心しらびと見ゆるなりといふ意と聞ゆ。下行水は。歌の表にては。やり水の事にて。裏の意にては。右大臣のかへりゆき給ふ心をいふなり。

うぐひすのいとによるてふ玉やなぎふきなみだりそ春のやまかぜ

よみ人しらず

○催馬樂に。青柳を片絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさと有て。柳は鶯の絲によるといふ物なれば吹亂らす事莫（ナ）かれと。風に合（オホ）するなり。みたりは。合（ミダラシ）亂といはんが如し。玉柳は。催馬樂高砂歌に「高さごの。さいさごの。をのへにたてる。白玉椿。玉

柳」云々。なども見えたり。たゞ柳を賞(ホメ)ていへるなり。

さくらの花のちるを見て。

○詞書は。櫻の花の散ける木の下にて。などあらまほしきここちす。歌の意は散たる後の事なればなり。

いつの間に散はてぬらん(にけん、六帖)さくら花

もかげにのみいろを見せつゝ

みつね

○抄云。さかりの時の俤ばかり殘して。いつの間にかく散はてしぞとなりといへり。實(グ)に咲たりと思ふほどもなく。散はてたれば。實(マコト)とも思はれずといふなるべし。(續古今(春上)に。爲家卿の。「よしさらばちる迄は見じ山櫻花のさかりをおもかげにして」とあるは。此歌により給へるなるべし。)上(此巻)に。「春くればさくてふ事をぬれ衣にきするばかりの花にぞ有ける」とあるに。大かた似たるもぶきなり。さて六帖に。「さかざらんものとはなしに櫻ばなにもかげにのみまだき見ゆらん」新勅撰(春上)に。「にもかげに花のすがたを先だてゝいくへこえ來ぬ峯の白雲」とあるなどは。いまだ花をば見ざるを。心の思ひなしにて。花を見るこゝちのして。面影に見ゆる意なり。此歌のは。散たる後になりて。なほ夢まぼろしなどの如く。それかとばかりほのかに覺ゆる心なり。(おもかげは。俗に。タハ目ニ見ユルと云ふ心ばへなり。六帖。新勅撰などのとは違へり。)同じ詞ながら。此歌にいへるはほのかにはかなき方にいへるにて。遣ひざまの異なる所にて。

あつみのみこの花見侍ける所にて。

○敦實(アツミノ)親王(コ)は。宇多天皇の皇子にはせり。

源中宣朝臣

ちるこゝろのうきもわすれてあはれてふここを櫻にやどしつるかな

○花の盛にうるはしきを見ては。散る事のうきをば忘れて。あゝはれ見事(ゴト)なことやといふ。あゝはれといふ感心の詞を。花にかけたるゆゑに。あゝはれと長大息(ナゲ)ことなり。あはれは。花を賞(メツ)る事なり。契冲法師云。櫻にやどすとは。花の上に置(オ)くことなり。

櫻のちるを見て。

よみ人しらず

さくらいろにきたる衣のふかければすぐる月日もをしけくもなし

○古今(春上)に。「櫻色に衣はふかく染て着ん花の散なん後のかたみに」とある。その櫻色

に深くそめて着つれば。散たらん後も。花の記念はあるゆゑに。月日の過るも。さしもをしからずとなり。さて。古今の歌の櫻色を。後世の註に。櫻重の事もて。表白。裏赤花といへるは違へりと。縣居大人いはれ。此櫻色といへるは。たゞ櫻の花の色にといへるなるべし。櫻色とて。さだまれる染色をいへるにはあらじと。横井千秋翁もいはれたり。されば此歌なるも。古今に同じく。櫻の花の色といふ事なるべし。

やよひにうるふ月あるこし。つかさめしのころ。申文にそへて。左大臣家につかはしける。

貫之

○公事根源に。京官除目。是は三月三日より先に行はるべき事なれど云々。京にある諸司を任らるゝ故に。京官とは申なり云々。縣召は外官をむねと任せらるるなり。外官とは。諸國の官にて侍る云々。司召は春の事。縣召は秋なり。猶末に。縣召の所に委く云ふ。申文は。我がなりたき官を望み申訴狀なりなど見えたり。

あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしもがな

○當春。三月に潤のあるは。君の御恵に餘分のあるやうなるものなり。せめてはかく餘分のある年になり。共御恵の春に。必ず遇はまほしき事かなとなり。後漢書張純傳云。閏ハ歳之餘云々。猶何くれに見えたり。

左大臣

かへし

つねよりものごけかるべきはるなれど光にひとのあはざらめやは

○一首の意は明らかなり。上句は。三月に閏のある事をいへるのみにて。御恵の方のたとへにはかゝはらず。下句にいたりて。御恵の事をたとへてのたまへるなり。此類の歌多くある事。上にいへるがごとし。初二句は。閏月のあるゆゑに。例の年よりのどけしとなり。拾遺春。「閏三月侍けるつごもりに。躬恒つねよりものどけかりつる春なれどけふのくるゝはをしくぞありける」

つねにまうできかよひける所に。さはる事侍て。ひさしくまできあはずして。年かへりにけり。あくる春。やよひのつごもりにつかはしける。

つかれ緒云。つれにまうでくる所に。紀貫之さはること有て、久しくま

できあはずして。年かへりにけり。あくる春。やよひつごもりにつかはしける。

○まうでき。又まできともに。物まうでなどのまうでに同じく。參るといふことなり。まうできかよひは。參り來かよひ。まできあはずは。參り來不逢なり。こは。までと云方正しき詞なるを。音便にて。まうでとはいふなり。此集のころのならひにて。尊卑上下にかゝはらず。こなたへ來る事をばまうで。かなたへ行くことをばまかるといふ事となりたる事。上(春中)卷にもいへるがごとし年かへるとは。一年のくれて翌年(アクルトシ)の春になりたるなり。春より春にかへりたる意なり。つごもりは。月隱(ツゴモリ)にて。すべては。一月の末の。廿五六日ころより末にて。月の光のなき頃を廣くいふ事鈴屋大人。眞暦考に委く辨へられたるが如くなれども。此詞書にいへるは全く晦日(ミソカ)の事なり。歌にて其よししられたり。

藤原雅正

きみこずて年はくれにきたちかへり春さへけふになりにけるかな

○常にしば〳〵來通ひ給ひたるを。去年よりは來給はねば。一向に對面もせずして。今年の春になり。その春もまたむなしくて。今日一日になりたる事かな。さて〳〵心ならず遠々しき事よとなり。

ともにこそはなをも見めとまつ人の來ぬものゆゑにをしき春かな

○君と共々に花をも見んと待たるに。その君の。かやうに來給はねば。何のたのしみもなければ。春の暮行くも。さしもをしくはあるまじき事なるを。なほ春のくるゝはをしく思はるゝ事かなとなり。來ぬものゆゑには。俗言に。來(キ)モセヌモノヂーヤニといふ意なり。古今春上。「待人もこぬものゆゑに鶯の鳴つる花ををりてけるかな」。

返し　つらゆき

君にだにとはれでふれは藤の花たそかれときもしらずぞありける

○これまでしば〳〵出會たる君にさへも。訪(ト)はれずして日ごろを經(フ)れば。鬱々(ウツ〳〵)とのみ屈(ク)し居て。時刻のうつるをもしらずに過す事よとなり。たそがれ時もと云て。朝夕の時刻のうつる事にいひ。さて時刻のうつるをもわきまへずと云て。月日の過て。暮春に成たることをもこめたるなり。抄に。白氏文集に。紫藤花下漸黃昏とある句の意にて。たそかれに藤をよみ合されしなるべし。とあるぞよろしき。たそかれとは。夕方のほのぐらき時は。誰(タレ)ぞ彼(カレ)ぞといふ事の見わき難きよりいふ詞なり。後世に。か文字を濁ても唱ふるは。非なり。されど。家集には「君にだにゆかでへぬれば藤衣たれがうときもしらずぞ有ける」とあるによりて見れば。喪中の事と聞ゆ。また。此集六帖などのさまにては。二句の詞。雅正朝臣も。とひがたき筋ありて。心

ならずも訪はれざるやうに聞え。次の歌の意も。たゞならぬさまに聞ゆれば。もしも詞書に。さはる事侍てとのみ有て。たしかに其ことゝかゝれざるは。公に對ひ奉ての畏(カシコ)にても有けんかし。

やへむぐら(ムグラ)こゝろのうちにふかけ(しげ、六帖)れば花見にゆかん出たちもせず

○葎の門などをとぢたるが如く。心の中にさはる事のしげくあれば。例(ツネ)の春の如く。君の許に行くべき心もせずとなり。此歌。上の「ともにこそ花をも見めと」云々と云にこたへられたるなり。○やへ葎。やへ櫻などのやへは。彌重(イヤヘ)の意にて。繁く重なる事なり。八重重とかけ合せたるにはあれど。そも詞のうへのかけ合のみにて。意は猶彌重の意なり。思ひまがふべからず

題不知

よみ人しらず

をしめごもはるのかぎりのけふの日の、(伊勢物語)また夕暮にさへなりにけるかな

○三月晦日の夕方の歌なり。意は明らかなり。

ゆくさきをしみし春のあすよりは來にし方にもなりぬべきかな

みつね

○春の暮て行くを。惜(ヲシ)き〳〵と思て居るうちに。春は既に暮竟(クレハテ)たれば。明日よりは舊(モト)來へ戻りて。此今までをしみたる春の。來(キタ)りたる方とは。秋冬などの事にはあれども。それを道路(ミチ)などの如くにいひなしたるなり。今春の尾を過離れなば。明日よりは又來ん春の首の方に行向ふならんといふやうの意なり。二句。春のの、の文字は。用語のの、にて。俗言に。ガといふのなり。(此歌。さるかたきふしはなけれども。ふと心得あやまるときは。さらに心得がたき歌にて。さて解釋(トカ)んとするにも。いさゝかいひとり難きまゝに。かくかやかくやと。くだ〳〵しくはいへるなり。)

又此歌の意。今日までは。我が暮しゆく前(サキ)にありて。をしみし春の。明日よりは。我身の後(アト)にならんといふやうにも開ゆれども。なほ然にはあらず。

やよひのつごもり。

○此詞書は。終に、文字を落せるにはあらぬか。つごもりにとありげなる所なり。

貫之

行さきになりもやするこたのみしを春のかぎりはけふにぞ有ける

○いまだ春ならぬ時は。かく暮し行く先の。春になる事もやと頼しを。そのたのみたる春は來ても。させる心ゆく事もなくて。春の日數の限は。今日にてある事よとなり。かくて。この歌詞の表の。なるといふ言は。行先に變(ナ)る。何時(イツ)に更(ナ)るなど云。其時に移變(ウツリカハル)をいふ詞にて。さて裏の意にては。身の昇進する事を。成出(ナリイヅ)とも。なるとのみも云。その詞にきかせて。此春などは。出身(ナリイヅ)る事もやと頼しものを。其時節の春は。けふ限にてある事よと。なげく意をかけたるなるべし。二三句のさまなど。必ずふくめたる趣意あるべく思はる。三月は。司召ある月なればなり。

花しあらば何かは春のをしからんくるこもけふはなげかざらまし

よみ人しらず

○花しあらばといふ句下の句までへかけて心得べし。一首の意は明らかなり。曾丹集。「花の香の枝にしとまるものならばくる〳〵春をもをしまざらまし」。後拾遺春下。「櫻花まだきな散そ何により春をば人のをしむとかしる」などあるをも引合せて見るべし。

くれてまたあすこだになき春の日を花のかげにてけふはくらさん

みつね

○春の日をは。春の日なるものをといふ意なり。花のかげにての花は。櫻にはかぎらず。廣く春さく花をいふなるべし。古今集の春部に。櫻の歌のかぎりは。さくらとよみ。又歌に花とのみよめるは。詞書に櫻とことわれり。さらで。たゞ花とよみたるは。廣く百花をよめるなりと。契沖阿闍梨も。縣居大人もいはれたり。然れば此集なるをも。かれになぞらへてしるべきなり。

三月のつごもりの日。ひさしうまうでこぬよしいひて侍るふみのたくに。書つけ侍ける。

○まうでこぬよしは。久しく來給はぬといふ事なり。

貫ゆき

又もこん時ぞと思へごたのまれぬ我身にしあればをしきはるかな

○けふ暮る〳〵春も。又來年は來るべき事ぞとは思へども。我身の存命(ナガラヘ)あらん事の頼まれねば。今日暮行事のをしく思はる〳〵事かなとなり。猶思ふに。初二句に。春ならても又も來給ふべき君ぞとは思へどもといふ意をふくめたるにもあるべし。かく

210
41

見る時は。上二句は。たとへの方と表裏にかけていひ。三、句以下は。表裏初句二、の意を一つに受ていへるなり。

貫之がくてなにしこになんみまかりにける。

○此左註は。撰者たちのはじめより書加へられたることか。又は後人の書加へたるにか。いづれにしてもさまたげなし。さて貫之主は。天慶九年卒と。作者部類に見えたり。

後撰和歌集巻第三新抄 終